

瓜郷遺跡(IV)・下五井館址・天王遺跡・宗正遺跡

-下五井・横須賀地区特定環境保全公共下水道工事の伴う埋蔵文化財発掘調査-

2007年3月

豊橋市教育委員会

うり ごう い せき よん しせ ご い やかた し てん のう い せき むね まき い せき
瓜郷遺跡(IV)・下五井館址・天王遺跡・宗正遺跡

-下五井・横須賀地区特定環境保全公共下水道工事の伴う埋蔵文化財発掘調査-

2007年3月

豊橋市教育委員会

例　　言

1. 本書は、下五井・横須賀地区（豊橋市下五井町他）において、特定環境保全公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。調査期間・調査面積は以下のとおりである。

調査年度	調査期間	調査面積
平成15年度調査	平成15年10月3日～平成16年2月13日	245m ²
平成16年度調査	平成16年9月1日～平成17年3月8日	140m ²
平成17年度調査	平成17年8月22日～23日	20m ²
2. 発掘調査は、平成15・16年度については豊橋市教育委員会が発注し、受託をした朝日航洋株式会社が豊橋市教育委員会の指導のもと行った。岩瀬彰利（豊橋市美術博物館学芸員）が調査の指導にあたり、宮川志高・杉山　仁・木戸心界・大浜良介（朝日航洋株式会社調査員）が調査を担当した。平成17年度については豊橋市教育委員会が行い、岩瀬が調査を担当した。
3. 本書作成にあたり、遺物・遺構等の実測・拓本・トレース等については、石川智江、井上佳子、竹嶋浩子、平賀静子、補永享代、岩本佳子（豊橋市美術博物館嘱託員）が行った。写真撮影については、発掘調査に際しては各調査担当者が、遺物については岩本が行った。
4. 座標は国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠したものである。本書に使用した方位はこの座標に沿うものである。
5. 本書の執筆・編集は岩瀬が行った。
6. 遺物・遺構のスケールについてはそれぞれに明示した。なお、写真的縮尺は任意である。
7. 本調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市教育委員会において保管している。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地	1
2. 歴史的環境	4

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過	6
2. 調査の方法	7

第3章 瓜郷遺跡

1. 調査グリッドの概要	10
2. 出土遺物	13

第4章 下五井館址

1. 調査グリッドの概要	15
2. 出土遺物	31

第5章 天王遺跡・宗正遺跡

1. 調査グリッドの概要	47
2. 出土遺物	51

第6章 動物遺体

1. 資料の採取と概要	58
2. 貝類・魚類	58

第7章 まとめ

挿 図 目 次

第1図	下五井・横須賀地区遺跡位置図 (1 / 25,000)	1
第2図	下五井・横須賀地区周辺地形図 (1 / 30,000)	2
第3図	下五井・横須賀地区周辺地形分類図 (1 / 30,000)	3
第4図	下五井・横須賀地区周辺の遺跡分布図 (1 / 25,000)	5
第5図	瓜郷遺跡調査区位置図 (1 / 2,500)	11
第6図	瓜郷遺跡調査区平面図・断面図 (1 / 50)	12
第7図	瓜郷遺跡出土遺物実測図 (1 / 3)	14
第8図	下五井館址調査区位置図 (1 / 2,500)	21
第9図	下五井館址調査区平面図・断面図 - 1 (1 / 50)	22
第10図	下五井館址調査区平面図・断面図 - 2 (1 / 50)	23
第11図	下五井館址調査区平面図・断面図 - 3 (1 / 50)	24
第12図	下五井館址調査区平面図・断面図 - 4 (1 / 50)	25
第13図	下五井館址調査区平面図・断面図 - 5 (1 / 50)	26
第14図	下五井館址調査区平面図・断面図 - 6 (1 / 50)	27
第15図	下五井館址調査区平面図・断面図 - 7 (1 / 50)	28
第16図	下五井館址調査区平面図・断面図 - 8 (1 / 50)	29
第17図	下五井館址調査区平面図・断面図 - 9 (1 / 50)	30
第18図	下五井館址出土遺物実測図 - 1 (1 / 3)	40
第19図	下五井館址出土遺物実測図 - 2 (1 / 3)	41
第20図	下五井館址出土遺物実測図 - 3 (1 / 3)	42
第21図	下五井館址出土遺物実測図 - 4 (1 / 3)	43
第22図	下五井館址出土遺物実測図 - 5 (1 / 3)	44
第23図	下五井館址出土遺物実測図 - 6 (1 / 3)	45
第24図	下五井館址出土遺物実測図 - 7 (1 / 3)	46
第25図	天王遺跡・宗正遺跡調査区位置図 (1 / 2,500)	48
第26図	天王遺跡調査区平面図・断面図 (1 / 50)	49
第27図	天王遺跡・宗正遺跡調査区平面図・断面図 (1 / 50)	50
第28図	天王遺跡出土遺物実測図 (1 / 3)	52

表 目 次

第1表 下五井・横須賀地区調査区一覧表	8
第2表 出土遺物觀察表	53
第3表 動物遺体出土調査区一覧表	59
第4表 貝層サンプル内容物組成表	59
第5表 動物遺体種名一覧表	59
第6表 貝類組成表	59

写真図版目次

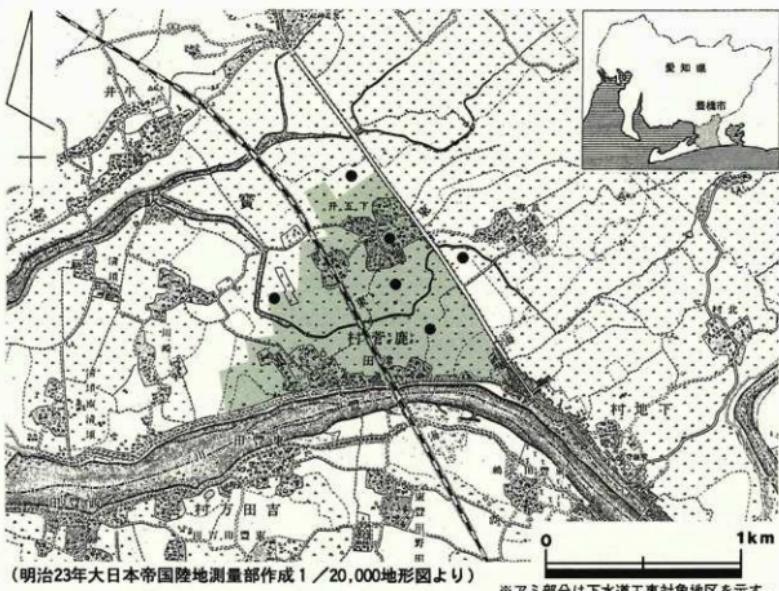
図版1-1 瓜郷遺跡 G1091全景(北から) 2	瓜郷遺跡 G1091西壁(東から)
2-1 瓜郷遺跡 G4201西壁(東から) 2	瓜郷遺跡 G4221西壁(東から)
3-1 瓜郷遺跡 G4221全景(北から) 2	瓜郷遺跡 G4221南壁(北から)
4-1 下五井館址 G5101全景(西から) 2	下五井館址 G5101東壁(西から)
5-1 下五井館址 G5122全景(東から) 2	下五井館址 G5231全景(北から)
6-1 下五井館址 G5172全景(南から) 2	下五井館址 G5172北壁(南から)
7-1 下五井館址 G5174全景(北から) 2	下五井館址 G5224全景(南西から)
8-1 下五井館址 G6181全景(南から) 2	下五井館址 G6202全景(西から)
9-1 下五井館址 G6192全景(北から) 2	下五井館址 G6192西壁(東から)
10-1 下五井館址 G6202全景(西から) 2	下五井館址 G6211南壁(北から)
11-1 天王遺跡 G6013全景(東から) 2	天王遺跡 G6014全景(南から)
12-1 天王遺跡 G6015全景(西から) 2	天王遺跡 G6021全景(南から)
13-1 天王遺跡 G6025全景(南から) 2	天王遺跡 G6025完掘後全景(南から)
14-1 天王遺跡 G6023全景(南から) 2	宗正遺跡 G4031全景(東から)
15 出土遺物-1	
16 出土遺物-2	
17 出土遺物-3	

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

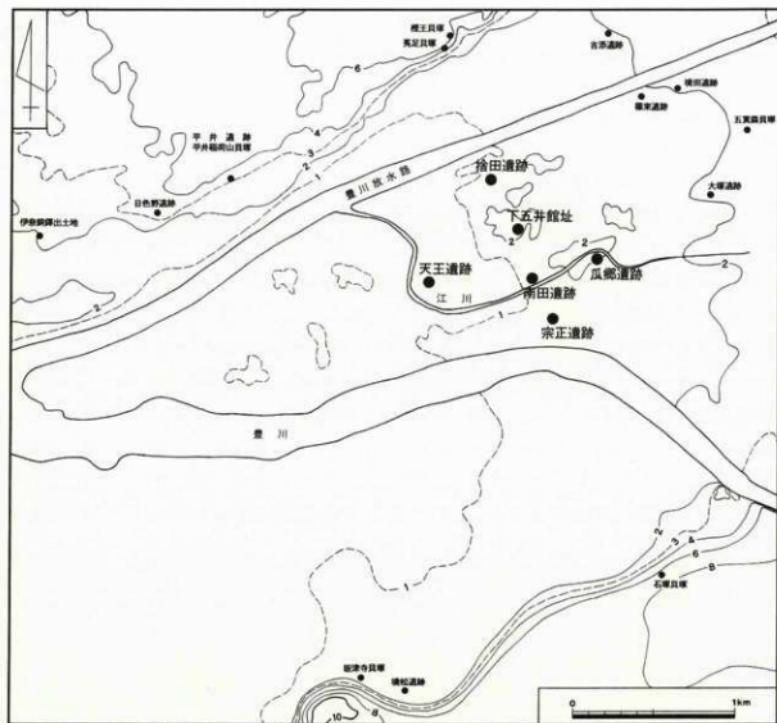
1. 遺跡の立地 (第1~3図)

下五井・横須賀地区は豊橋市の西部、豊川河口部の沖積地に広がる地区である。この地区的立地については、『南田遺跡・瓜郷遺跡(Ⅲ)』の報告書で詳細に検討(註1)されており、それを参考に述べよう。

豊橋市は三河湾東部に位置し、市域北側を豊川が流れ三河湾に注いでいる。豊川は奥三河山間部を源とし、中央構造線に沿って南西に流下する1級河川である。この豊川河口部右岸に広がるのが下五井・横須賀地区である。第2図はこの地区的標高を表したものである。豊川河口部で近くに内湾があるという立地から天王遺跡で標高1m以下、南田遺跡・捨田遺跡・宗正遺跡が標高1m、瓜郷遺跡・下五井城址は標高2mというように、標高1~2mの低地に立地している。第3図は地形分類図である。この地区は沖積地、豊川の三角洲上に立地し、そこには島状に自然堤防が点在している。地形分類でみると、瓜郷遺跡や下五井館址は自然堤防上に立地している。豊川は近世以後に河道が河道が固定されるまでは頻繁にその流路を変え、それに対応して自然堤防が形成されている。標高2m以下の



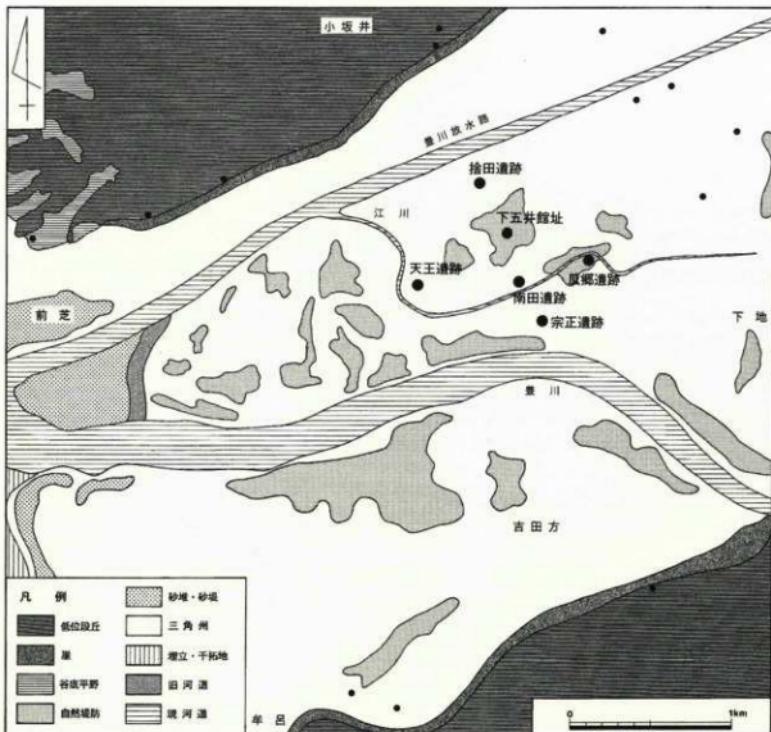
第1図 下五井・横須賀地区遺跡位置図 (1/25,000)



第2図 下五井・横須賀地区周辺地形図 (1/30,000)

低地では河道勾配が緩いため流路が網状流となり、江川などの小河川は網状流化した小河川の旧流路と考えられる。海岸近くでは沿岸流によって運ばれた砂堆が形成されている。

南田遺跡の調査では、調査区で観察された層序を基に標高 -2 mから 2 mまでの堆積環境が推定復元されている。それによると、V層とする疊や粘土の混ざる灰色系の砂層が標高-1.7m以下にあり、弥生後期の小海進期に浅海で堆積した海砂か海岸近くで波によって打ち上げられた砂が堆積した砂堆と推測されている。その上には標高 -1 mの高さまでIV層とする流木を含む砂疊層が堆積する。この層は小海進後の弥生時代後期～古墳時代前期に洪水によって運ばれた砂疊が堆積した乾質な河成堆積物である。III層とするシルトを含む砂層は古墳時代中期～平安時代の遺物包含層である。この層は標高 -0.6mまで堆積している。II層はシルト層で、標高 -0.3mまで堆積している。中・近世の遺物包含層である。II・III層ともに細質な成分が卓越し、黒色で腐食も進んでいることから、後背湿地のような淡水性の低湿な環境で堆積し、その環境が安定して継続していたと推測される。I層は表土であり、標高0.7mの高さまで堆積している。南田遺跡の周辺は自然堤防に挟まれた後背湿地にあたり、



第3図 下五井・横須賀地区周辺地形分類図 (1/30,000)

標高も低く低湿な環境にあることがわかっている。このような環境は古墳時代中期から現在まで継続し、この低湿な環境を利用して水田が作られ、集落は隣接する自然堤防に立地したものと解釈されている。

南田遺跡の調査成果が示すように、下五井・横須賀地区は、海退で広がった沖積平野の低湿地で水田がつくられ、各所に点在した自然堤防上に集落が営まれていたものと推測される。弥生時代後期の小海進時には塩分濃度が上がるが、地下水位も高くなつて内陸側も低湿地化し、それに伴つて水田も内陸側へ移動した。古墳時代以降は現在と同じレベルの海水準になり、豊川の堆積作用により沖積地は拡大・高燥化するが、安定した水田耕作地として継続している。

註1 水野季彦 1996 「第1章 遺跡の立地と歴史的環境」「南田遺跡・瓜郷遺跡(Ⅲ)」豊橋市教育委員会

2. 歴史的環境（第4図）

下五井・横須賀地区のある豊川河口部の沖積低地には、国指定史跡の瓜郷遺跡をはじめ、様々な遺跡が存在する。以下では、時代ごとに周辺遺跡について述べる。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、下五井・横須賀地区には無いが、上流側へ1.5mの沖積微行高地上には晩期の大蚊里貝塚（第4図14）や五貫森貝塚（同13）がある。大蚊里貝塚は晩期前葉～中葉を中心とした時期の貝塚（ヤマトシジミ主体）である。土器や石器、土偶などが多数出土しており、この地区的拠点集落と推測される。五貫森貝塚は五貫森式土器の標識遺跡であり、ヤマトシジミを主体とした小貝塚と土器棺や伸展葬の人骨が出土している。この他には、宗正遺跡で縄文土器の可能性のある土器片が1点採集されている以外は、縄文時代の遺跡は確認されていない。

弥生時代

弥生時代になると五貫森貝塚の西方約100mの位置に大塚北遺跡（第4図12）が形成される。この遺跡は前期水神平式期の遺跡である。以後は微高地上に中期中葉～後期の瓜郷遺跡（同1）、中期の緑遺跡（同19）、後期の大塚遺跡（同11）、境田遺跡（同10）が立地しており、弥生時代中期頃の弥生小海退や後期の弥生小海進のように海水準の高低に伴って遺跡の立地も変動している点は興味深い。瓜郷遺跡は当地域を代表する遺跡であり、4つの小貝塚をともなう集落址である。出土遺物には多量の弥生土器のほか、石器や石斧などの石器、釣針やモリなどの骨角器、鉢などの木製農耕具があり、当時の炭化米も発見されている。

古墳時代

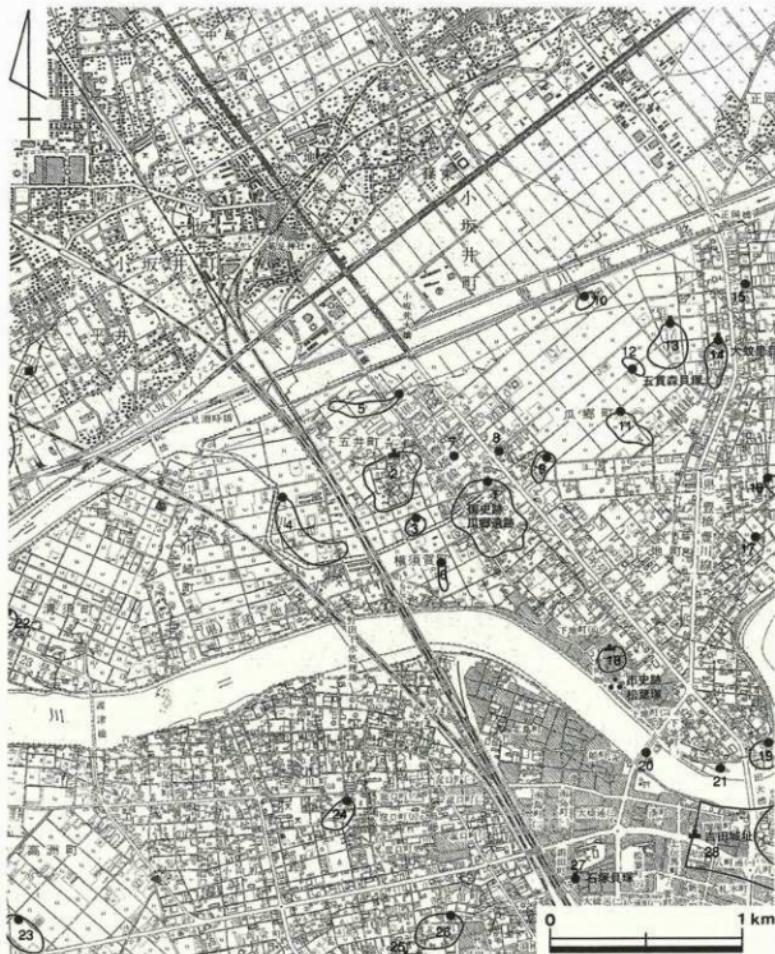
古墳時代の遺跡はほとんど判っていない。古墳時代の遺物は、瓜郷遺跡では前期の土師器が、南田遺跡（第4図3）では中期の土師器が、大塚遺跡、大塚北遺跡で土師器が出土しているのみである。

古代

奈良時代の遺跡についてはよく判っていない。ただ、天王遺跡（第4図4）、改正遺跡（同7）、下五井館址（同2）から須恵器が出土している。平安時代の遺跡は、南田遺跡では井戸から曲物・斎串などの木製品や灰釉陶器碗、須恵器甕が出土している。大蚊里貝塚では溝が検出され、溝内より灰釉陶器が出土している。このほか瓜郷遺跡でも灰釉陶器が出土している。このように断片的な情報しかないが、古代においても沖積微高地上に集落が営まれていたものと考えられる。

中世以降

中世以降の遺跡は多く、下五井館址、捨田遺跡（第4図5）、改正遺跡、宗正遺跡、一新替遺跡（同8）などから中世陶器が採集されている。このうち、下五井館址は中島修理が城主の城館址と伝えられているが、造構は全く遺っておらず詳細は不明である。中世では、城館を中心に沖積微高地上に多くの集落が形成されていたものと推測される。また、近世東海道が瓜郷遺跡上を通っており、この地区は交通の要衝であったものと考えられる。



- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 1. 瓜郷遺跡 | 2. 下五井館址 | 3. 南田遺跡 | 4. 天王遺跡 | 5. 捨田遺跡 |
| 6. 宗正遺跡 | 7. 改正遺跡 | 8. 一新替遺跡 | 9. 高道遺跡 | 10. 境田遺跡 |
| 11. 大塚遺跡 | 12. 大塚北遺跡 | 13. 五貫森貝塚 | 14. 大蛇里貝塚 | 15. 橋元遺跡 |
| 16. 大ノ前遺跡 | 17. 大堤遺跡 | 18. 下地館址 | 19. 緑遺跡 | 20. 豊川河床遺跡 |
| 21. 外畠遺跡 | 22. 兵庫遺跡 | 23. 小島遺跡 | 24. 東小向遺跡 | 25. 羽田村古城址 |
| 26. 百北遺跡 | 27. 石塚貝塚 | 28. 吉田城址 | | |

第4図 下五井・横須賀地区周辺の遺跡分布図（1/25,000）

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過

平成14年9月、豊橋市上下水道局下水道工事課（当時）より、下五井・横須賀地区において特定環境保全公共下水道築造工事を行う旨の事前の相談が市教育委員会美術博物館にあった。特定環境保全公共下水道築造工事は地域下水道整備のことであり、現在の県道・市道下に下水管を布設、下水管の要所にはマンホールを設置する工事である。工事は下水管埋設部分が幅1m以下、マンホール設置部分が約2.5m×2m（約5m²）の範囲で開削し、掘削深度は地点により異なるが1.5m前後、期間は平成15年8月～平成16年3月のことであった。

市教育委員会では、今回の下水工事対象地内に国指定史跡である瓜郷遺跡をはじめ、下五井館址、南田遺跡、捨田遺跡、天王遺跡、宗正遺跡の6遺跡が含まれていることを確認した。このうち瓜郷遺跡、捨田遺跡、天王遺跡は一部が工事範囲内に含まれるのみであった。下水道工事について上下水道局と市教育委員会で対応を協議し、工事内容を検討した。下水管埋設部分については幅1m以下と狭く調査が困難なため立会調査、マンホール設置部分については約5m²と広いため発掘調査の必要があるとの認識で協議を進めた。ただ、マンホール部分の工事は、旧国道1号線や市道など車や歩行者の往来が激しい場所であり、交通規制をする必要がある。さらに下水管埋設工事の進捗状況に合わせてマンホールの工事が行われるとのことであった。このことから発掘調査自体の日程は流動的であり、市教育委員会では対応が困難であるとの認識にいたった。このため発掘・立会の現地調査については、民間企業に委託し、遺物整理及び報告書作成については市教育委員会が行う方針で調整を行った。

平成15年度になり、文化財保護法第57条の3に基づき平成15年6月4日付けで上下水道局から愛知県教育委員会宛に「埋蔵文化財発掘の通知について」が提出され、平成15年6月24日付けで県教育委員会から上下水道局へ、マンホール部分については発掘調査、下水管埋設部分については立会調査の指示がなされた。これに基づき市教育委員会が発掘調査の主体となり、現地調査を行う民間調査会社を選定した。選定に際しては指名競争入札を行い、落札した朝日航洋株式会社が市教育委員会指導の基、現地調査を担当した。平成15年度の発掘調査は工事の進捗状況に合わせて、平成15年10月3日～平成16年2月13日にかけて瓜郷遺跡、下五井館址、宗正遺跡の3遺跡で49箇所（245m²）を行った。管路部分の立会調査も併行して行っている。

平成16年度の発掘調査も指名競争入札を行い、落札した朝日航洋株式会社が現地調査を担当した。調査は平成16年9月1日～平成17年3月8日にかけて下五井館址、天王遺跡の2遺跡で28箇所（140m²）を行った。管路部分の立会調査も併行して行っている。当初は、天王遺跡の4箇所（20m²）を加えた32箇所（160m²）を調査し、この年度で現地調査を完了する予定であった。しかし、工事の遅れから、天王遺跡の4箇所については次年度に繰り越すことになった。

平成17年度の発掘調査は、天王遺跡の4箇所（20m²）と面積が少なかった。このためコストの面で民間委託業務に適さず、市教育委員会が平成17年8月22日～23日に直接調査を行っている。

調査費用は原因者負担の原則に基づき、上下水道局が負担したが、下水道受益者が一部を負担している。

2. 調査の方法

発掘調査は、マンホール設置部分の約 $2.5m \times 2m$ （約 $5m^2$ ）という狭い範囲で行った。マンホール設置のための掘削坑をそのまま調査区としている。マンホール設置位置図を発掘調査区の位置図に兼用しているため、各調査区ごとに新たに座標を計測することは行っていない。ただ、標高については水準測量の数値を用いている。調査区名は混乱を避けるため、マンホール番号と同じとし、頭にGを冠して使用した。また調査区は生活路として使っている道路内にあるため、当日中に仮復旧して交通路の確保に努める必要があった。このため、発掘調査は工事の進捗状況に合わせて入り、復旧を考慮して2時間で調査を終了するように努め、調査時間が延びる場合は市教育委員会と上下水道局とで協議して決めるとした。

次に発掘調査の手順であるが、マンホール設置業者の重機を用いて掘削し、工事業者の警備員が調査中の安全確保にあたった。調査区は全て沖積地であり、発掘調査のための掘削深度はマンホール掘削深度より掘り下げるとした。掘削は段階的に掘り下げ、精査して遺構を確認した場合はその面で調査に入った。また下層に遺構面があるかも確認し、最終的にはマンホール掘削深度まで掘り下げる。なお、具体的な作業順序は以下のとおりである。

1. 重機を使用して調査区内のアスファルト、表土剥ぎを行う。
2. 人力で遺構検出・掘削を行い、遺物を取り上げる。
3. 遺構を完掘させ、調査区平面図・断面図を完成させる。
4. 調査区の清掃を行い、全体写真を撮影する。

今回の調査は、1日に1～2箇所のペースで調査が進んだ。道路下であったが土層層序が攪乱を受けていなかったのは予想外であった。瓜郷遺跡では遺構面が複数確認され、旧東海道も検出されたが、他の遺跡では遺構面は1面検出されたのみであった。

第1表 下五井・横須賀地区調査区一覧表

遺跡名	調査区	遺構	遺物	担当者
瓜郷遺跡	1082	なし	なし	宮川
	1091	なし	なし	宮川
	4201	なし	なし	宮川
	4211	なし	なし	宮川
	4221	SK-1, SK-2, SK-3	弥生土器(壺・台付壺)	宮川
下五井館址	5041	なし	中世陶器(碗)、陶器、磁器、土師器(皿)、瓦	宮川
	5042	なし	中世陶器(碗・壺)	宮川
	5051	なし	弥生土器(壺・高环・壺)、陶器、土師器	宮川
	5061	なし	弥生土器、陶器、土師器、瓦	宮川
	5062	なし	磁器、土師器、瓦	宮川
	5063	なし	陶器(碗・壺)、土師器(皿)、瓦	宮川
	5064	なし	陶器(碗・壺)、土師器	宮川
	5071	なし	陶器(鉢)、土師器(皿・鍋)	宮川
	5072	SK-1, SD-1?	陶器(擂鉢・碗)、土師器(皿)	宮川
	5075	なし	磁器、土師器、瓦	宮川
	5077	なし	陶器	宮川
	5081	なし	陶器(擂鉢)、瓦	宮川
	5091	なし	なし	大浜
	5092	なし	なし	宮川
	5101	SK-1, SE-1	中世陶器(碗)、陶器、磁器、土師器(鍋)	大浜
	5111	なし	なし	宮川
	5121	なし	陶器(皿)、土師器(皿・鍋)、瓦	宮川
	5122	SK-1	弥生土器?、陶器(皿・壺)	宮川
	5123	なし	陶器	宮川
	5124	なし	陶器、磁器	宮川
	5131	貝層(マガキ)	須恵器(壺)、陶器(碗・擂鉢)	宮川
	5151	なし	なし	宮川
	5161	なし	なし	宮川
	5171	なし	陶器、磁器、土師器(皿・鍋)	大浜
	5172	SK-1, 貝層 (ハマグリ, ツメタガイ)	陶器、土師器(皿・鍋)	大浜
	5173	なし	中世陶器(碗)、陶器(擂鉢)、磁器	大浜
	5174	SK-1, SK-2	中世陶器、陶器、磁器、瓦	大浜
	5181	なし	なし	宮川
	5182	なし	陶器(碗・鉢)	宮川
	5183	なし	陶器、磁器、瓦	宮川
	5191	なし	なし	宮川
	5201	なし	中世陶器、土師器	宮川
	5211	なし	中世陶器、陶器、土師器(皿)	宮川
	5213	なし	陶器(碗・擂鉢)、磁器	宮川
	5215	なし	中世陶器(碗)、陶器(皿)、磁器、土師器(鍋)、瓦、錢貨	宮川
	5224	貝層 (ハマグリ、ヤマトシジミ)	須恵器(壺)、中世陶器(碗)、磁器(碗)	大浜

	5225	なし	灰釉陶器	大浜
	5231	貝層(ハマグリ)	陶器、磁器、土師器(鍋)	杉山
	5232	なし	陶器(碗・擂鉢)	杉山
	5233	貝層(ダンベイキサゴ)	陶器、磁器	杉山
	5241	なし	陶器、磁器、土師器(皿・鍋)、瓦	宮川
	5242	なし	なし	宮川
	5243	なし	土師器(甕)	宮川
	5251	なし	磁器、瓦	宮川
	5252	なし	陶器、磁器	宮川
	5261	なし	なし	宮川
	5281	なし	なし	木戸
	6171	なし	中世陶器(壺)	宮川
	6181	SK-1	弥生土器、陶器(碗・擂鉢)、土師器(皿・鍋)	宮川
	6191	なし	陶器、磁器	宮川
	6192	SK-1、貝層(ヤマトシジミ)	陶器、土師器	宮川
	6193	貝層(ハマグリ)	陶器、土師器	宮川
	6201	SX-1、貝層(ハマグリ、ヤマトシジミ)	中世陶器、陶器、土師器(皿・鍋)	大浜
	6202	SD-1、貝層(ヤマトシジミ)	陶器、磁器、土師器(皿)、瓦	宮川
	6203	なし	土師器(甕)	宮川
	6211	貝層(ハマグリ、ヤマトシジミ)	土師器(皿)、土玉	大浜
	6251	なし	なし	大浜
	6302	なし	なし	宮川
	6252	なし	陶器、瓦	宮川
	7051	なし	陶器、磁器、瓦	宮川
	7052	なし	陶器(碗)	宮川
	7053	なし	中世陶器(碗)、陶器(碗)	宮川
	7061	なし	陶器、瓦	宮川
	7071	なし	陶器	宮川
	7083	なし	なし	宮川
	7091	なし	なし	宮川
天王遺跡	6012	なし	なし	宮川
	6013	なし	なし	宮川
	6014	なし	なし	木戸
	6015	なし	なし	木戸
	6021	なし	須恵器、中世陶器(碗)、土師器	岩瀬
	6023	SD-1、SK-1	須恵器、土師器(甕)	岩瀬
	6024	なし	なし	岩瀬
	6025	SD-1	須恵器(甕)	岩瀬
	6041	なし	なし	木戸
	6051	なし	なし	木戸
宗正遺跡	4031	なし	なし	宮川

第3章 瓜郷遺跡

瓜郷遺跡内の調査は、旧国道1号線を中心とした遺跡の西端部分であり、5箇所(25m)のマンホール部分を発掘調査した(第5図)。またマンホール間の下水管路設部分についても立会調査を行っている。調査では東海道の遺構下から弥生時代の遺構が確認された。ここでは遺構・遺物の出土しているものを中心に説明する。

1. 調査グリッドの概要(第5・6図)

G 1082 (第6図)

アスファルトの下には採石層(2)が厚く入れられており、その下にはガス管埋土である茶色砂層(3)が確認された。これ以下は掘削しなかったので、この面で調査を止めた。遺構・遺物は確認されていない。

G 1091 (第6図)

地表下40cmの深さで近世東海道の道路面と考えられる層が確認された。厚さ5cm程に敷き伸ばされた茶色土層(5)があり、他のグリッドで検出された旧東海道路面と若干異なるが、この層を路面と考えた。その下には地固めの茶色砂質土層(6)があり、全体で約17cmの厚さがあった。この層の下には褐色粘質土層(7)、暗褐色粘質土層(8)、灰色砂質土層(9)などの粘質土や砂質土が堆積している。遺構・遺物は確認されていない。

G 4201 (第6図)

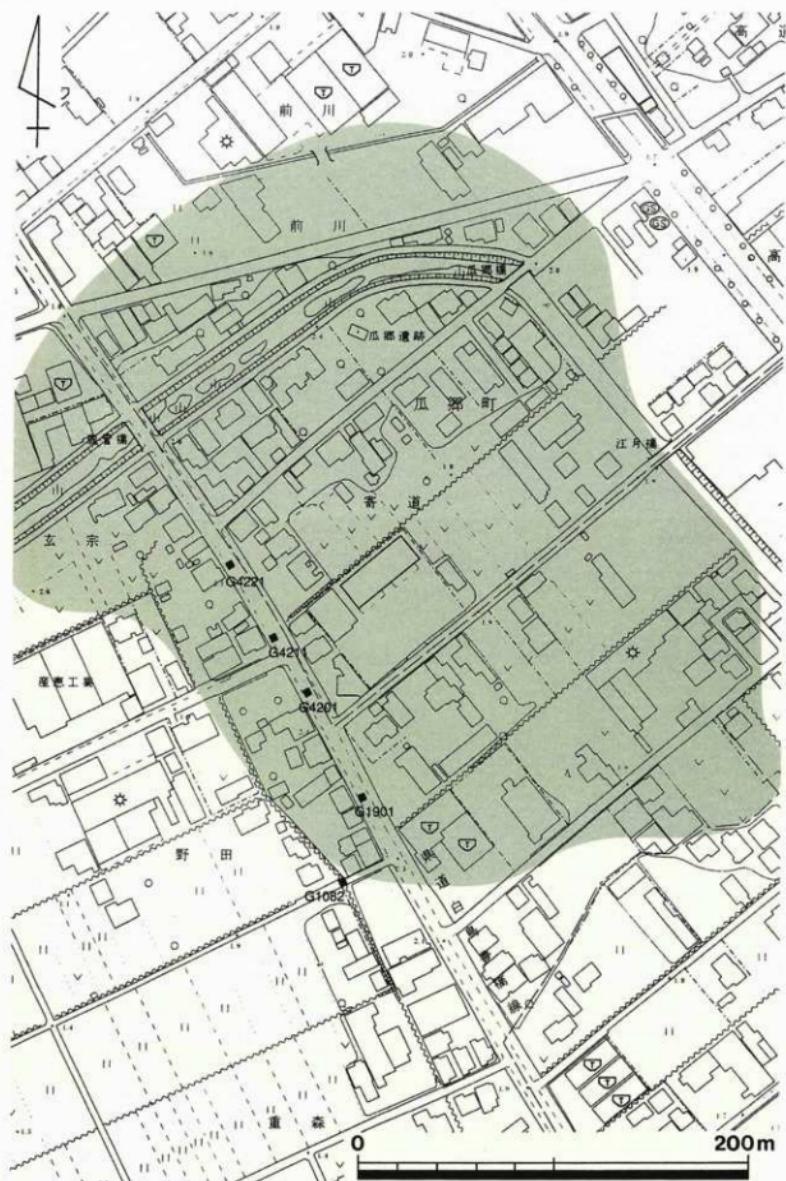
地表下37cmの深さで近世東海道の道路面が確認された。厚さ7cm程の暗灰色砂層(4)を路面としており、その下は黄褐色砂質土層(5)、茶褐色砂層(6)で版築しており、全体で約20cmの厚さがあった。この下からは更に路面と考えられる厚さ4cm程の灰色土層(7)が堆積しており、地固めとして赤茶色砂層(8)、茶色砂層(9)で版築している。全体で厚さは22cm程である。旧東海道は青灰色シルト層(10)上に築かれていた。この層の下には茶褐色シルト層(11)が堆積している。遺構・遺物は確認されていない。

G 4211 (第6図)

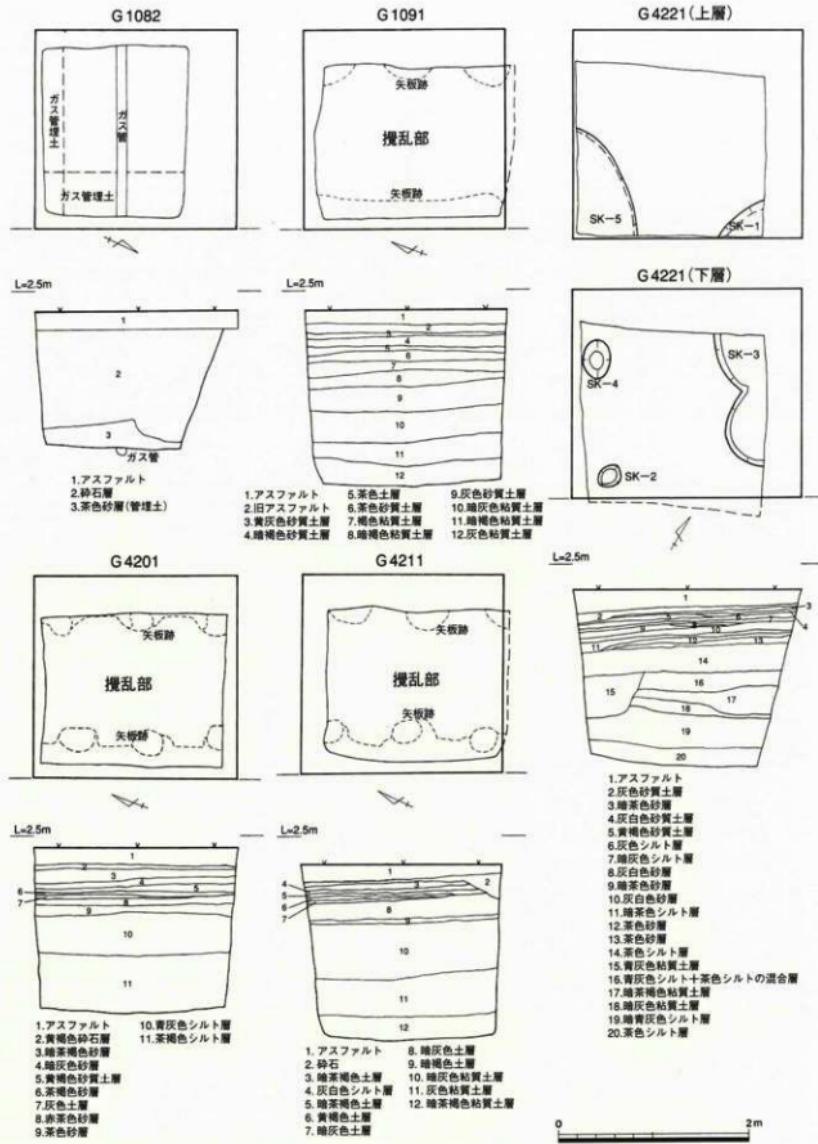
近世東海道の道路面が地表下25cmの深さで確認された。路面は厚さ5cm程の灰白色シルト層(4)で整地し、その下は暗茶褐色土層(5)、黄褐色土層(6)、暗灰色土層(7)で版築されており、旧東海道は約10cmの厚さであった。旧東海道の基盤となる暗灰色土層(8)の下には暗褐色土層(9)が5cm程の厚さで堆積している。その下に暗灰色粘質土層(10)、灰色粘質土層(11)、暗茶色粘質土層などの粘質土が1.2mの厚さで堆積している。遺構・遺物は確認されていない。

G 4221 (第6図)

このグリッドからは東海道の路面が3面確認できた。最も新しい路面はアスファルト下から検出した灰色砂質土層(2)であり、厚さは最大で10cmが測られた。その下には暗茶褐色砂層(3)、灰白



第5図 瓜郷遺跡調査区位置図 (1/2,500)



第6図 瓜郷遺跡調査区平面図・断面図 (1/50)

色砂質土層（4）、黄褐色砂質土層（5）で地固めしており、路面からの全体で約12cmの厚さがあった。2番目の路面は地表下32cmの深さから検出された灰色シルト層（6）であり、厚さは5cm程度であった。その下には地固めとして暗灰色シルト層（7）、灰白色砂層（8）、暗茶色砂層（9）で地固めしている。路面からの全体で厚さは12cm程度である。最も古い路面は地表下50cm程度で検出された灰白色砂層（10）である。この層は厚さ7cm程度で、その下には地固めとして暗茶色シルト層（11）、茶色砂層（12）、茶色砂層（13）がみられた。路面からの全体で20cm程度の厚さが測られた。各路面の形成時期は遺物が出土していないためわからない。東海道は茶色シルト層（14）上に築かれていた。この層下には青灰色シルトと茶褐色シルトの混合層（16）が堆積しているが、この層からSK-5が掘り込まれていた。SK-5を検出したのは暗灰色粘質土層（18）であったが、本来は長さ1.1m以上、深さ45cmの土壌であるものと考えられる。SK-5からは遺物は出土しておらず時期は不明である。暗灰色粘質土層（18）にはSK-1が掘り込まれていた。SK-1は長さ1.1m以上、深さ45cmの土壌であり、中からは弥生土器が出土していることから、弥生時代のものと思われる。SK-1を覆うように暗茶褐色粘質土層（17）が10cm程度の厚さで堆積している。この層からは弥生土器が出土し、上層として遺物を取り上げている。暗青灰色シルト層（19）の下には厚さ20cm程度で茶色シルト層（20）があり、この層からは弥生土器が出ているため、下層として取り上げている。この層から、ベース層を掘り込んだ土壌が3基検出されている。SK-2は楕円形の土壌で、規模は長径30cm、深さ19cmであり、中からは弥生土器が出土している。SK-3は双円形と思われる土壌であり、規模は長径1.4m以上、深さ27cmである。中からは弥生土器が出土している。SK-4は楕円形の土壌で、規模は長径40cm、深さ10cmである。遺物は出土していない。

2. 出土遺物（第7図）

瓜郷遺跡から出土した遺物には、弥生土器、磁器、石器があるが、コンテナ箱（34×54×20cm）1箱にも満たない程度と、遺物の出土量は少ない。ここではグリッド毎に遺物を説明する。なお遺物についての細かな調整・法量等は第1表に記してある。

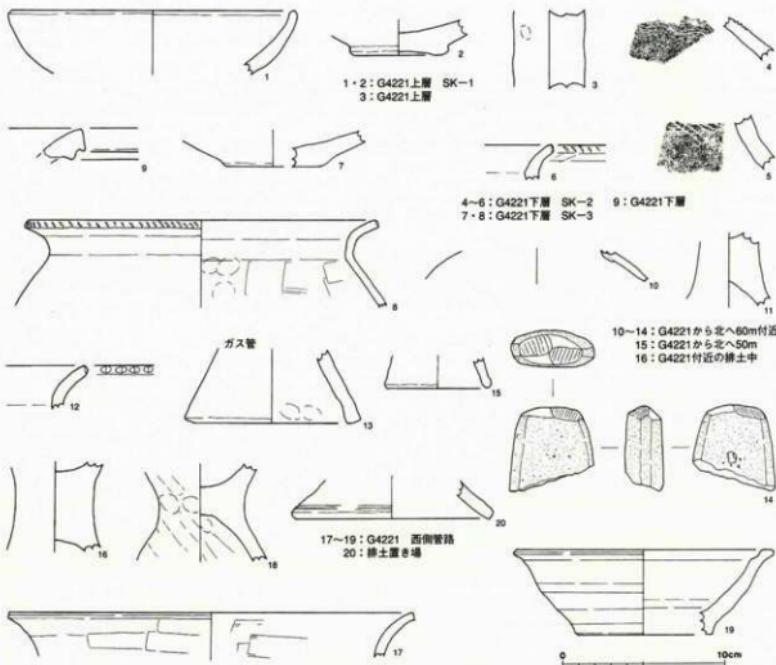
G 4 2 2 1（第7図1～9）

1～3は上層出土の土器である。1・2はSK-1出土の土器である。1は弥生土器・高壺の口縁部破片である。口縁部は内湾して端部は丸い。調整は摩滅しており不明。2は弥生土器・壺の底部であり、底が僅かに窪んでいる。調整は内外面ナデである。3は弥生土器・台付壺の台部破片で、体部との接続部分である。調整は摩滅のため不明である。

4～9は下層出土土器である。4～6はSK-2出土土器である。4・5は弥生土器・壺の体部破片で、外面には櫛描文が認められる。調整は内外面ナデである。6は壺の口縁部破片で、端部に刻目が入れられている。7・8はSK-3出土の土器である。7は弥生土器・壺の底部で、調整は内外面ナデである。8は弥生土器・台付壺であり、口縁部は強く外反し、端部に刻目が連続して入れられている。調整は内面ナデ・板ナデ・指押さえ、外面はナデである。9は弥生土器・壺の口縁部破片である。口縁部は肥厚され、端部は面を持つ。外面に突帯が巡らす。調整は内外面ナデである。

立会出土土器（第7図10～20）

10～14はG 4 2 2 1から北へ60m付近で出土した土器である。10は弥生土器・壺の体部破片で、器形は内湾した球形をなすものと思われる。調整は内面ナデ、外面摩滅である。11は弥生土器・高坏で、ハの字形に聞く脚部破片と思われる。調整は摩滅のため不明である。12・13は弥生土器・台付壺である。12は強く外反する口縁部破片で、端部に刻目が連続して入れられている。調整は内外面ナデである。13はハの字形に聞く台部破片で、内外面摩滅である。14は石器・敲石と思われる破片である。頂部に擦った痕跡がみられる。磨製石斧の可能性もある。15はG 4 2 2 1から北へ50m付近で出土した土器である。弥生土器・台付壺の脚部破片である。16はG 4 2 2 1付近の排土中から出土した土器である。弥生土器・台付壺の接続部破片で、円柱状をなしている。17～19はG 4 2 2 1西側管路から出土した土器である。17は弥生土器・壺である。口縁部は外反し、端部は面を持つ。調整は内外面板ナデである。18は弥生土器・台付壺の接続部破片である。調整は内面ナデ・板ナデ、外面は板ナデ、指押さえである。19は磁器・碗である。口縁部は広がり、端部でやや外反する。高台は削り出し高台である。調整は内面回転ナデ、外面は回転ナデ、回転ヘラケズリである。20は排土置場採集の土器である。弥生土器・台付鉢のハ字状脚部破片で、調整は内面ナデ、外面ナデ・板ナデである。



第7図 瓜郷遺跡出土遺物実測図（1/3）

第4章 下五井館址

下五井館址の調査は、遺跡内に巡らされた道路上のマンホール部分であり、ほぼ全域に66箇所（330m²）の発掘調査した（第8図）。またマンホール間の下水管埋設部分についても立会調査を行っている。調査では遺構・遺物が出土する調査区が少なかった。詳細は後述するが、現道が城館の堀などに造られている理由に起因するものと思われる。ここでは遺構・遺物の出土しているものを中心に説明する。

1. 調査グリッドの概要（第8～17図）

G 5041（第9図）

埋設水道管のため一部を残して掘り下げている。碎石層の下には暗茶褐色疊層（5）があり、暗色土層（6）、暗灰色シルト層（7）、暗茶色粘質土層（8）の順で堆積している。その下にある厚さ7cm程の暗黃灰色粘質土層（9）からは中世陶器（碗）が出土しており、下層として取り上げている。このグリッドから、遺構は確認されていない。

G 5042（第9図）

埋設水道管のため一部を残して掘り下げている。アスファルトの下には暗灰色砂層（6）があり、暗灰色粘質土層（9）、暗茶色粘質土層（10）、砂層（11）の順で堆積している。このグリッドから、中世陶器（壺）が出土しているが、遺構は確認されていない。

G 5051（第9図）

旧表土と思われる茶色土層（7）の下には、暗黃灰色シルト層（8）、茶色シルト層（9）、暗黃灰色粘質土層（10）の順に堆積している。その下には暗茶色粘質土層（11）が50cm程の厚さで砂層上に堆積しており、ここから古墳時代の土師器が出土している。遺構は確認されていない。

G 5061（第9図）

埋設された水道管とガス管のため、中央部のみを掘り下げている。アスファルト下は造成が著しく、暗茶色粘質土層（11）のみが攪乱を受けていない土層である。この層から、瓦や土師器（皿）が出土しているが、遺構は確認されていない。

G 5062（第9図）

埋設された水道管とガス管のため、中央部のみを掘り下げている。黄茶色疊層（8）以下が攪乱を受けていない土層である。この下には黄灰色疊層（10）、黄灰色粘質土層（11）、茶色粘質土層（12）が堆積している。茶色粘質土層は厚さ2cm程と薄くて破碎貝が混ざっており、この層から磁器、土師器が出土している。その下の層には、茶色粘質土層（14）、暗黃灰色粘質土層（15）、暗灰色粘質土層（16）、暗茶色粘質土層（17）が堆積し、暗茶色粘質土層から曲物が出土している。遺構は確認されていない。

G 5063（第9図）

茶褐色土層（3）が旧表土と思われ、この下には暗灰色粘質土層（4）、黒茶色粘質土層（5）、暗

灰色粘質土層（6）、黒茶色粘質土層（7）、暗茶色粘質土層（8）、暗灰色砂質土層（9）の順で堆積している。遺物では陶器（碗・壺）、土師器（皿）が出土しているが、遺構は確認されていない。

G 5064 (第10図)

埋設された水道管のため東側の一部のみが残存している。暗青灰色粘質土層（9）は擾乱を受けていない土層であり、その下は砂層である。このグリッドからは、遺物では陶器（碗・壺）、土師器が出土しているが、遺構は確認されていない。

G 5071 (第10図)

埋設された水道管のため、グリッド西側のみを掘り下げている。碎石層下には茶色シルト層（3）があり、以下、茶色砂質土層（4）、濃茶色粘質土層（5）の順で堆積している。このグリッドからは陶器（鉢）、土師器（皿・鍋）が出土しているが、遺構は確認されていない。

G 5072 (第10図)

碎石層の下には茶色粘質土層（3）があり、暗茶色粘質土層（5）が続く。この層から土師器（皿・鍋）が出土し、上層として取り上げている。またこの層からは、長さ40cm以上、深さ20cm以上の土壙SK-1が掘り込まれている。SK-1の埋土は茶色粘質土層（4・7）で一部に貝殻が混ざり、中から陶器（碗・擂鉢）、土師器（皿）が出土している。その下には暗茶色粘質土層（6）があり、陶器（擂鉢）、土師器（皿）が出土し、下層として取り上げている。この層の最下面でSD-1?を検出した。SD-1?は幅50cm程で、深さ8cm程の蛇行した溝みが検出されたものであるが、溝でない可能性もある。

G 5075 (第10図)

埋設された水道管と排水管のため、中央部の一部のみを掘り下げている。貝の混ざる厚さ2cm程の茶色粘質土層（5）以下が擾乱を受けていない土層である。この下には茶色粘質土層（6）、暗黄茶色粘質土層（7）、暗黄茶色粘質土層（8）が堆積している。遺物は磁器、土師器が出土しているが、遺構は確認されていない。

G 5077 (第10図)

埋設された排水管のため、西側の一部のみを掘り下げている。茶灰色粘質土層（6）以下が擾乱を受けていない土層である。この下には暗茶色粘質土層（10）、砂層（11）が堆積している。遺物は陶器が若干出土しているが、遺構は確認されていない。

G 5081 (第10図)

埋設された水道管とゴミ穴のため、擾乱が著しい。茶色粘質土層（8）が唯一擾乱を受けていない土層である。遺物は陶器（擂鉢）が出土しているが、遺構は確認されていない。

G 5101 (第11図)

埋設された排水管のため、西側の一部は掘っていない。暗灰黄色砂層（4）以下が擾乱を受けていない土層である。この下には黄褐色シルト層（6）があり、この層をSK-1、SD-1、SE-1が掘り込んでいる。SK-1は長さ50cm以上、深さ50cmの土壙で、中から中世陶器（碗）、陶器（擂鉢）が出土している。SD-1は長さ1.8m、幅40cm以上、深さ不明の溝である。SE-1は長さ82cm以上、深さ1.2m以上の井戸である。長さ約30cm、厚さ約2cmの板材を桶状に組んで木枠とし、3段に

積み重ねて使用していた。中から陶器（碗）、土師器（鍋）、曲物などが出土している。黄褐色シルト層の下には黒褐色シルト層（7）が堆積している。

G 5121 (第11図)

表土は茶色砂層（1）であり、その下に貝の混ざる茶褐色シルト層（2）があり、陶器（皿）、瓦が出土している。この下には褐色シルト層（3）があり、土師器（皿・鍋）が出土している。その下には赤褐色土の混ざる褐色シルト層（4）が堆積している。遺構は検出されていない。

G 5122 (第11図)

埋設された排水管のため、北側の一部は掘っていない。碎石層の下は褐色シルト層（3）があり、東側に貝層が確認できた。貝層は褐色シルト層（4）の混貝土層である。その下の褐色シルト層（5）は粘性が高く、土師器が出土している。この層からSK-1が掘り込まれていた。SK-1は長さ45cm、深さ16cmの土壙であり、中から陶器（皿）、土師器が出土している。

G 5123 (第11図)

埋設された排水管のため、北側の一部は掘っていない。碎石層の下は貝の混ざる暗褐色シルト層（4）がある。この層からは陶器（碗）が出土している。その下に褐色シルト層（5）、暗灰色シルト層（6）がある。遺構は検出されていない。

G 5124 (第11図)

埋設された排水管のため、南側の一部は掘っていない。碎石層の下は褐色土層（5）があり、陶器（碗・鉢）が出土している。その下に褐色シルト層（6）があり、更に下には貝の混ざる褐色シルト層（7）、暗灰色シルト層（8）、灰色砂質土層（9）が堆積している。遺構は検出されていない。

G 5131 (第11図)

埋設された水道管のため、中央部の一部のみを掘り下げている。碎石層の下には灰色粘質土層（3）、暗茶色粘質土層（4）、暗茶色砂質土層（5）が堆積している。暗茶色粘質土層からは須恵器（甕）、陶器（碗・擂鉢）が出土している。遺構は確認されていない。

G 5171 (第12図)

整地層（2）の下には昭和に埋め戻された流路の埋土（3～6）が堆積している。ここから陶器（碗）が出土している。茶褐色シルト層（7）以下が未擾乱の層である。その下には黄褐色シルト層（8）があり、土師器（皿・鍋）が出土している。黄緑褐色シルト層（9）、淡茶褐色シルト層（10）が堆積している。遺構は検出されていない。

G 5172 (第12図)

アスファルトの下には黄褐色シルト層（3）があり、暗黄灰色砂層（4）が続く。その下の灰黄色シルト層（6）との間層として黒褐色混土貝層（5）が堆積する。灰黄色シルト層（6）の下部は貝殻混じりの灰黄色シルト層（7）がみられる。黄褐色シルト層（8）の下には、黑灰黄色混貝土層（9）、暗褐色シルト層（10）がブロック状に堆積し、SK-1埋土でもあるハマグリ主体の黒褐色混貝土層（11）が厚く堆積している。この層からは土師器（皿・擂鉢・鍋）が出土している。SK-1は完掘をしていないが長さ50cm以上の土壙で、灰黄色シルト層（12）を掘り込んでいる。

G 5173 (第12図)

埋設された排水管のため、東側の一部は掘っていない。造成土の下は黄褐色シルト層（3）があり、その下に黄褐色砂層（4）、黄褐色シルト層（5）があり、中世陶器（碗）、陶器（碗・擂鉢）が出土している。その暗赤褐色シルト層（6）、灰褐色粘土（7）、黒黄褐色粘土（8）、灰黄色砂層（9）が堆積している。遺構は検出されていない。

G 5 1 7 4 (第12図)

暗褐色シルト層（1）があり、その下に暗褐色シルト層（3）から埋土が黒灰色粘土の掘り込みが確認された。そこからは中世陶器（碗）、陶器（碗）、土師器（皿）、瓦などが出土している。灰褐色シルト層（4）、炭化物を多く含む暗灰褐色シルト層（5）、暗黄灰色シルト層（6）が堆積している。その下の明黄褐色粘土（10）をSK-1、SK-2が掘り込んでいる。SK-1は幅1m、長さ1.3m、深さ15cmの長方形と思われる土壙である。SK-2は長さ1.5m以上、深さ37cmの土壙である。

G 5 1 8 2 (第12図)

水道管埋設のため擾乱が著しく、未擾乱の層は黄茶色シルト層（11）のみであった。グリッドからは擾乱部分より陶器（碗）が出土するが、遺構は検出されていない。

G 5 1 8 3 (第12図)

埋設された水道管のため、北側の一部は掘っていない。黄色碎石層（3）以下には現代水路跡が確認され、木杭の列が確認された。暗灰色砂質土層（6）のみが旧耕作土であり、未擾乱の層である。遺物は暗灰色粘質土層（5）から陶器（碗）、磁器、瓦が出土しているが、遺構は確認されなかった。

G 5 2 1 1 (第13図)

埋設された水道管のため、グリッド南側のみを掘り下げている。赤色碎石層下には暗茶色砂層（5）があり、以下、淡灰色砂層（6）、茶色粘質土層（7）、暗茶色粘質土層（8）、暗灰色粘質土層（9）の順で堆積している。このグリッドからは中世陶器（碗）、陶器、土師器（皿）が出土しているが、遺構は確認されていない。

G 5 2 1 3 (第13図)

埋設された水道管のため、グリッド東側のみを掘り下げている。暗茶色シルト層（3）以下が未擾乱の層であり、暗灰色粘質土層（4）、茶色粘質土層（5）、灰色シルト層（6）、明茶色粘質土層（7）、茶色粘質土層（8）、暗茶色粘質土層（9）、青灰色粘質土層（10）の順で堆積している。このグリッドからは陶器（碗・擂鉢）、磁器が出土しているが、遺構は確認されていない。

G 5 2 1 5 (第13図)

埋設された水道管のため、東側は掘り下げていない。暗黄灰色砂層（4）の下が未擾乱の層であり、暗茶色シルト層（7）、暗灰色粘質土層（8）、砂層（9）の順で堆積している。このうち暗茶色シルト層（7）より上を上層、暗灰色粘質土層（8）を下層として遺物を取り上げている。上層からは須恵器（壺）、灰釉陶器、中世陶器（碗）、陶器（碗・擂鉢）、磁器、土師器が、下層からは陶器（皿）、土師器（鍋）、錢貨が出土している。遺構は確認されていない。

G 5 2 2 4 (第13図)

埋設された水道管のため、西側の一部は掘り下げていない。暗褐色シルト層（8）の以下が自然堆積の層であり、灰褐色シルト層（9）、明黄褐色シルト層（10）、黄褐色砂層（11）の順で堆積している。

このグリッドからは須恵器（甕）、中世陶器（碗）、磁器（碗皿）等が出土している。遺構は確認されていない。

G 5 2 2 5 （第13図）

埋設された水道管のため、北側の一部は掘り下げていない。黒褐色シルト層（4）が旧表土であり、以下黄褐色砂層（5）、貝が混ざる黄褐色砂層（6）、貝が混ざる黒褐色シルト層（7）、貝が混ざる明黄褐色砂層（8）、暗黄色粘土の順で堆積している。このグリッドからは灰釉陶器（碗）が出土している。遺構は確認されていない。

G 5 2 3 1 （第13図）

大半が攪乱されており、西側の一部が残存していたのみであった。暗灰色砂質土層（3）が旧表土であり、以下暗褐色混貝土層（4）、貝が混ざる褐色砂質土層（7）の順で堆積している。このグリッドからは陶器、磁器、土師器（鍋）が出土している。遺構は確認されていない。

G 5 2 3 2 （第14図）

埋設された水道管のため、殆どが攪乱されており、未攪乱の層は明黄褐色砂質土層（7）のみであった。このグリッドからは陶器（碗・擂鉢）が出土している。遺構は確認されていない。

G 5 2 3 3 （第14図）

埋設された水道管のため、全てが攪乱されていた。このグリッドからは陶器（仏飯器）、磁器が出土している。遺構は確認されていない。

G 5 2 4 1 （第14図）

南側にはコンクリートがあり、掘り下げていない。茶色粘質土層（5）が旧表土と思われ、その下の暗茶色粘質土層（6）からは陶器（甕）、磁器、瓦、土師器（皿・鍋）が出土している。その下層は暗灰色粘質土層（7）である。遺構は確認されていない。

G 5 2 4 3 （第14図）

埋設された水道管と排水管のため、中央部のみを掘り下げている。茶色シルト層（4）が旧表土と思われ、茶色粘質土層（5）が続く。その下には暗茶色粘質土層（6）と茶色砂質土層（7）が並ぶが、どちらかが遺構埋土になるかは判らない。このグリッドからは磁器、瓦が出土している。

G 5 2 5 1 （第14図）

埋設された水道管のため、中央部のみを掘り下げている。暗茶色粘質土層（9）以下が未攪乱である。その下の暗灰色砂質土層（11）を掘り込んで暗灰色粘質土層（10）が確認されている。遺物は磁器と瓦が出土している。

G 5 2 5 5 （第14図）

埋設された排水管のため、西側は掘り下げていない。アスファルト下の暗茶色砂層（2）が旧表土と思われ、以下灰色粘質土層（3）、暗茶色粘質土層（4）、黄茶色粘質土層（5）の順で堆積している。暗茶色粘質土層（4）からは陶器（碗）、磁器が出土している。遺構は確認されていない。

G 6 1 7 1 （第15図）

埋設された水道管のため、東側は掘り下げていない。碎石下の黄褐色砂層（3）が旧表土と思われ、その下に暗灰色粘質土層（4）が堆積している。暗茶色粘質土層（4）からは陶器（碗）、磁器が出

土している。遺構は確認されていない。

G 6 1 8 1 (第15図)

碎石層下の黄褐色土層（3）以下が未擾乱の層である。その下には淡黄褐色粘質土層（4）、黄褐色粘質土層（5）、淡黄灰色粘質土層（6）、黄灰色粘質土層（7）が続いている。黄灰色粘質土層（7）の土層をみると溝状に暗褐色粘質土層（11）を掘り込んでおり、溝が存在していた可能性がある。また、暗褐色粘質土層（11）を SK-1 が掘り込んでいる。SK-1 は長さ25cm、深さ23cmの円形土壙であり、中から土師器（鍋）が出土している。この暗褐色粘質土層（11）は遺物包含層であり、土師器（壺・高杯・台付壺）が出土している。この層より下は、北側のみを掘り下げ、褐色粘質土層（12）、暗茶褐色粘質土層（13）、黄灰色砂質土層（14）が確認されている。

G 6 1 9 1 (第15図)

碎石層下の暗灰色シルト層（4）、暗褐色粘質土層（5）が以下が未擾乱の層と思われる。このグリッドからは、陶器（碗）、磁器などが出土している。遺構は検出されていない。

G 6 1 9 2 (第15図)

碎石層下には茶色粘質土層（3）があり、貝が混ざる暗茶色粘質土層（4）、茶色粘質土層（5）、暗茶色砂質土層（6）と続いている。この暗茶色砂質土層（6）を SK-1 が掘り込んでいる。SK-1 は長さ1.1m、深さ13cmの土壙であり、中から陶器、土師器が出土している。

G 6 1 9 3 (第15図)

埋設されたガス管のため、東側の一部のみを掘り下げている。茶色砂質土層（6）以下が未擾乱層であり、暗灰色粘質土層（7）、黄灰色砂層（8）と続いている。遺物は陶器（碗）、土師器が出土している。遺構は確認されていない。

G 6 2 0 1 (第15図)

碎石層下には淡黄褐色砂質土層（5）があり、黄褐色砂質土層（6）以下が未擾乱層である。その下に灰褐色粘質土層（8）があるが、間層として貝が混ざる暗褐色粘質土層（7）がある。灰褐色粘質土層（8）の下には淡灰褐色砂質土層（10）があるが、この層を SX-1 が掘り込んでいる。SX-1 は長さ1.4m以上、深さ22cm以上の土壙と思われるが、マンホール掘削が深さ1.4mまでであったので、完掘をしていない。このグリッドからは中世陶器（碗・壺）、陶器、土師器（壺・皿・鍋）が出土している。

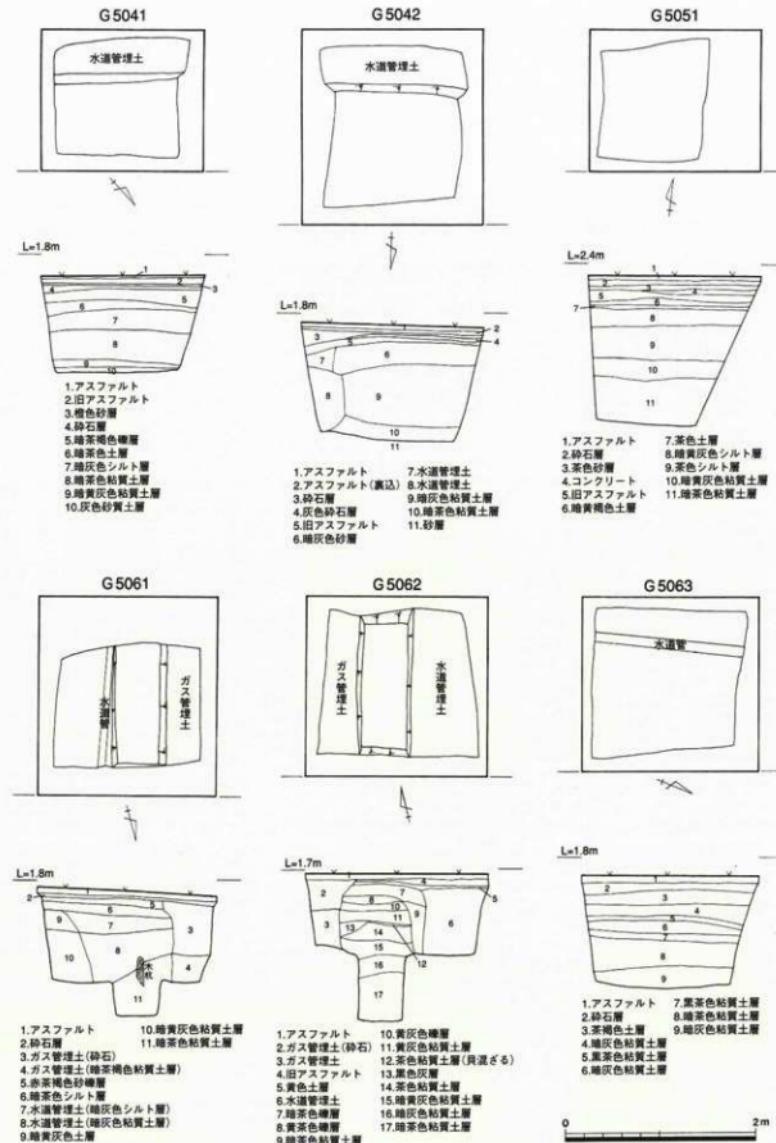
G 6 2 0 2 (第16図)

碎石層下には黄褐色粘質土層（4）があり、陶器（擂鉢）、磁器、土師器（皿）が出土している。その下に下層を掘り込んで SD-1 が検出された。SD-1 は長さ1.8m以上、幅75cm以上、深さ20cmの溝である。

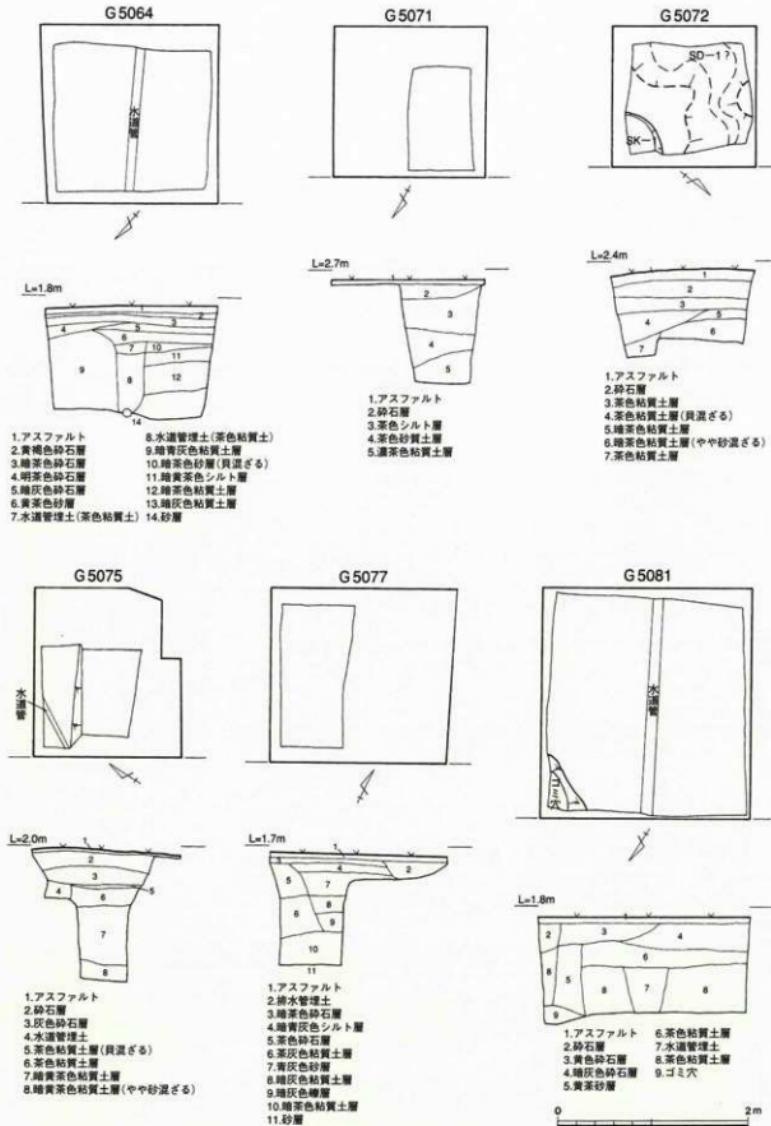
G 6 2 0 3 (第16図)

暗褐色粘質土層（7）が旧表土と思われ、黄褐色粘質土層（8）、暗褐色粘質土層（9）、貝の混ざる暗褐色粘質土層（10）、暗灰色粘質土層（11）、黒灰色粘質土層（12）と堆積している。暗灰色粘質土層（11）からは土師質の壺と木片が出土している。遺構は確認されていない。

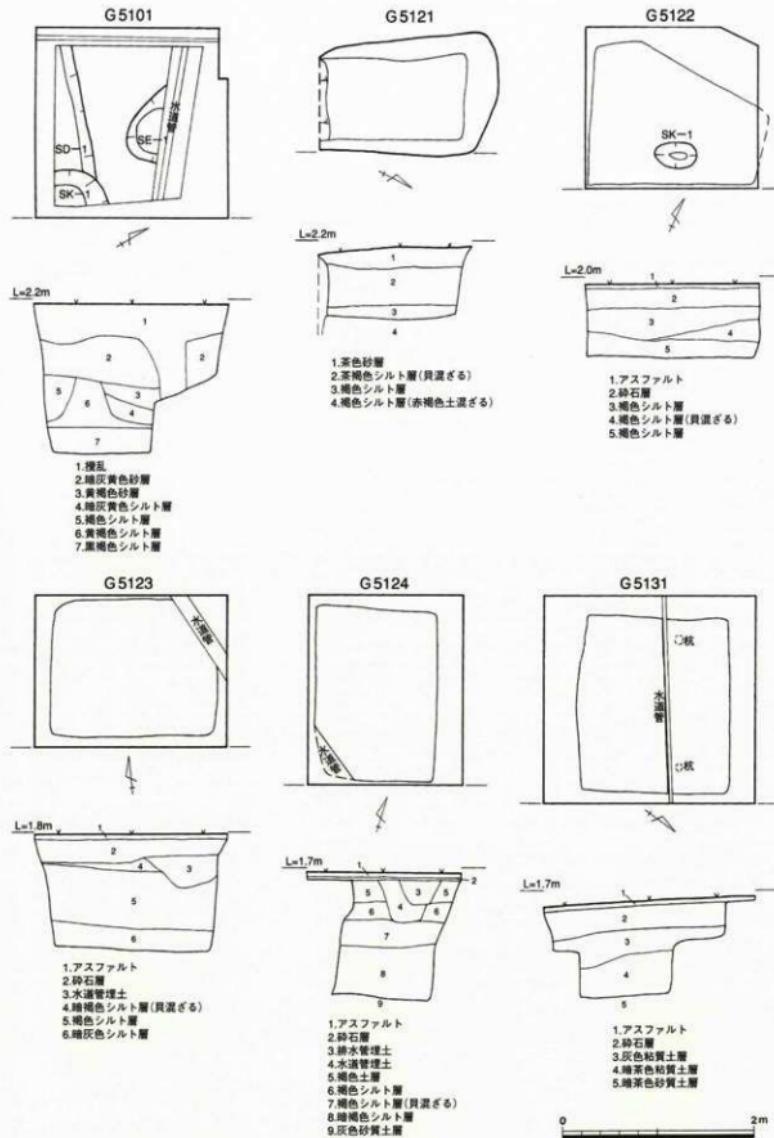
G 6 2 1 1 (第16図)



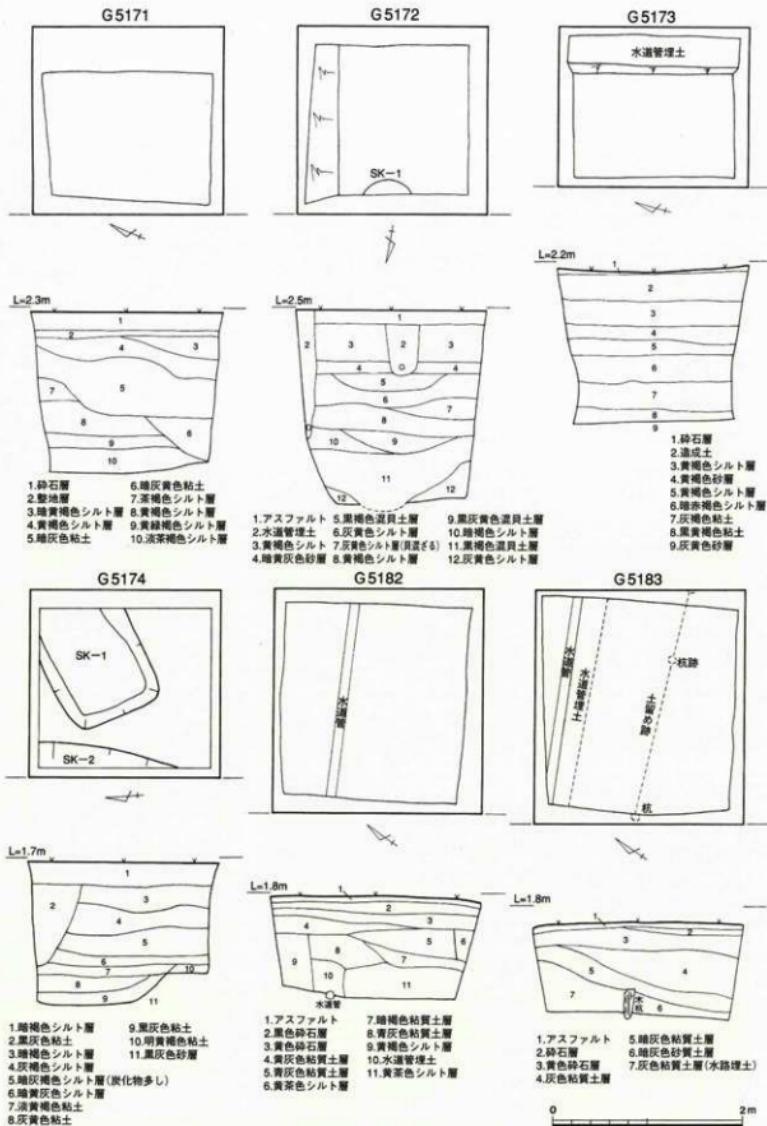
第9図 下五井館址調査区平面図・断面図-1 (1/50)



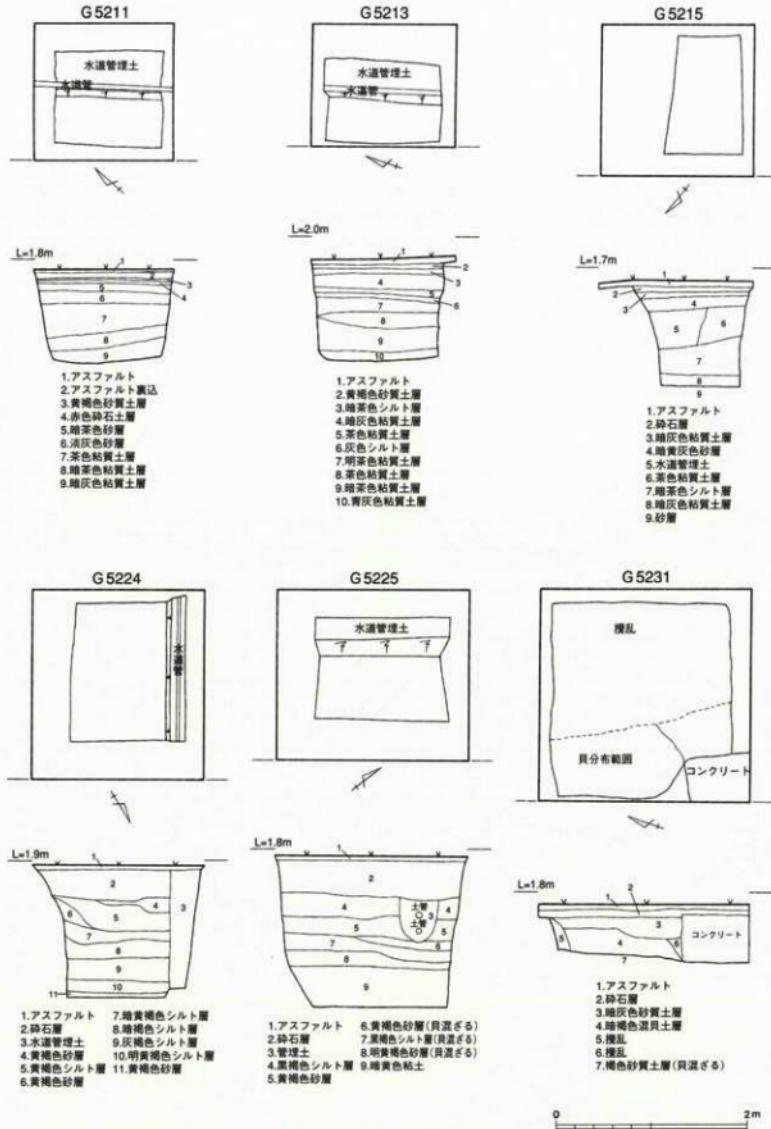
第10図 下五井館址調査区平面図・断面図-2 (1/50)



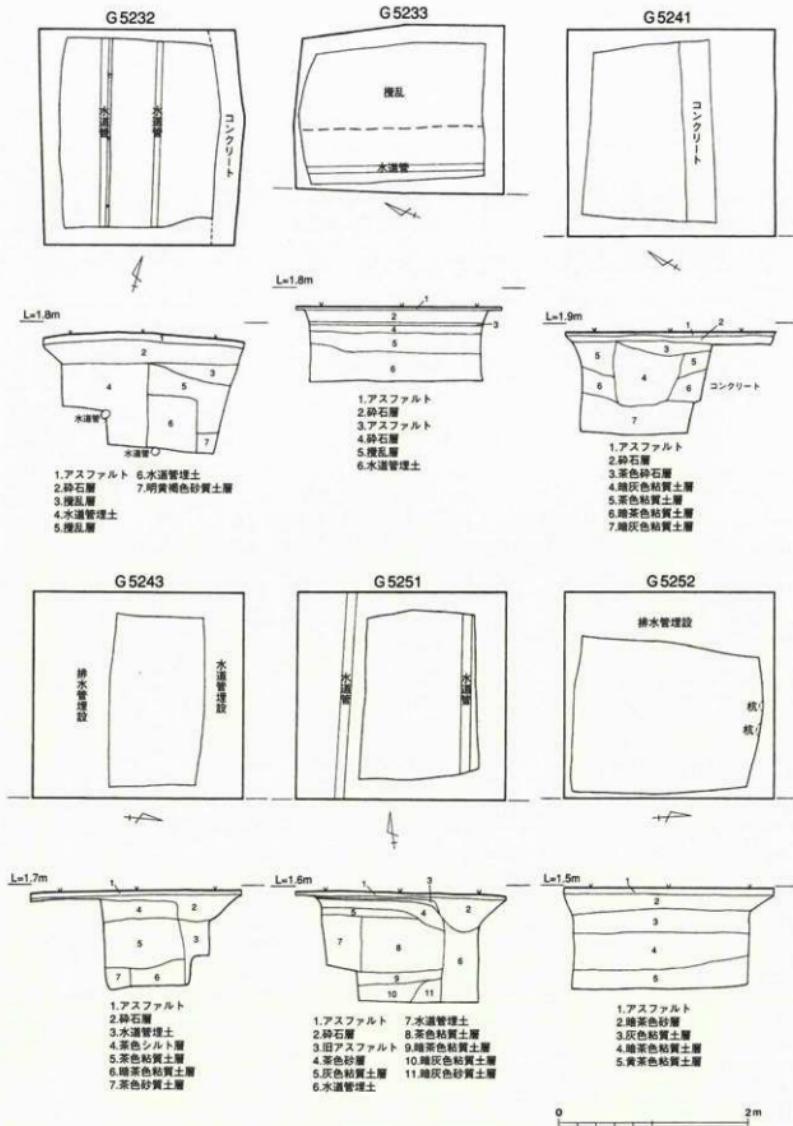
第11図 下五井館址調査区平面図・断面図-3 (1/50)



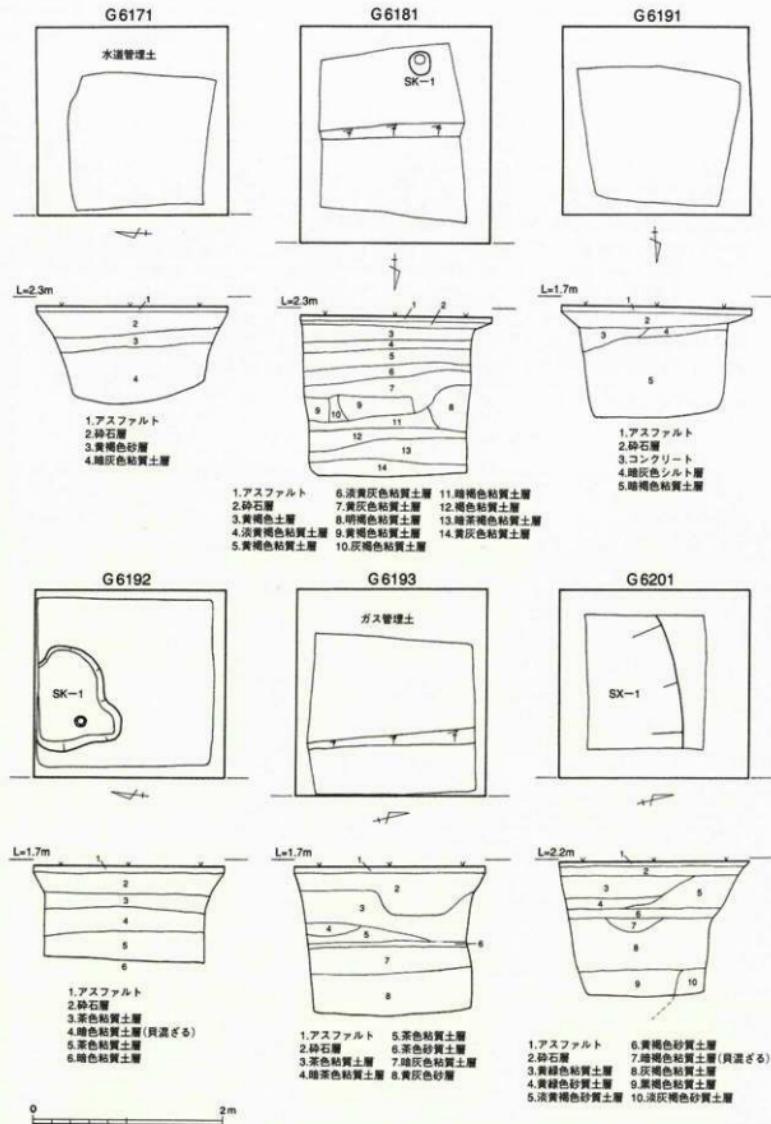
第12図 下五井館址調査区平面図・断面図-4 (1/50)



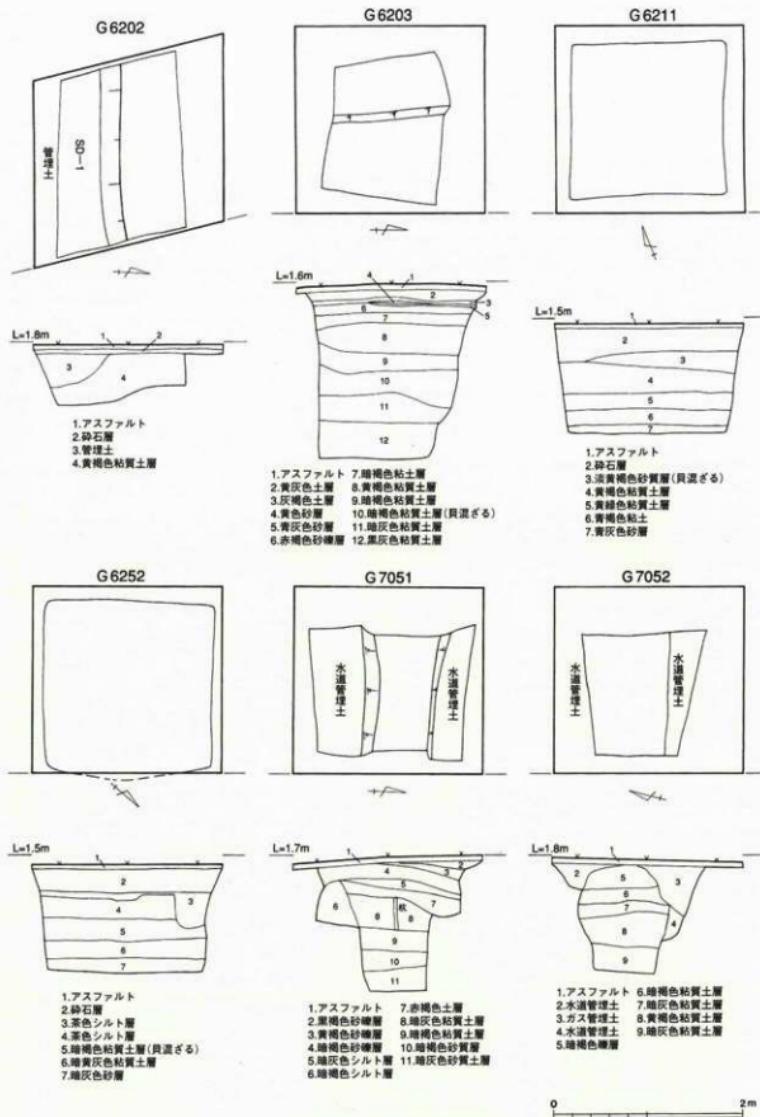
第13図 下五井館址調査区平面図・断面図-5 (1/50)



第14図 下五井館址調査区平面図・断面図-6 (1/50)



第15図 下五井館址調査区平面図・断面図-7 (1/50)



第16図 下五井館址調査区平面図・断面図-8 (1/50)

碎石層の下には貝が混ざる淡黄褐色砂質土層（3）があり、黄褐色粘質土層（4）、黄緑色粘質土層（5）、青褐色粘土（6）、青灰色砂層（7）と堆積している。黄褐色粘質土層（4）からは土師器（皿）が、青褐色粘土（6）からは土玉が出土している。遺構は確認されていない。

G 6 2 5 2 (第16図)

碎石層の下には茶色シルト層（3）があり、暗茶色シルト層（4）、貝が混ざる暗茶色粘質土層（5）、暗黃灰色粘質土層（6）、暗灰色砂層（7）と堆積している。グリッドから遺物は陶器、瓦が出土しているが、遺構は確認されていない。

G 7 0 5 1 (第16図)

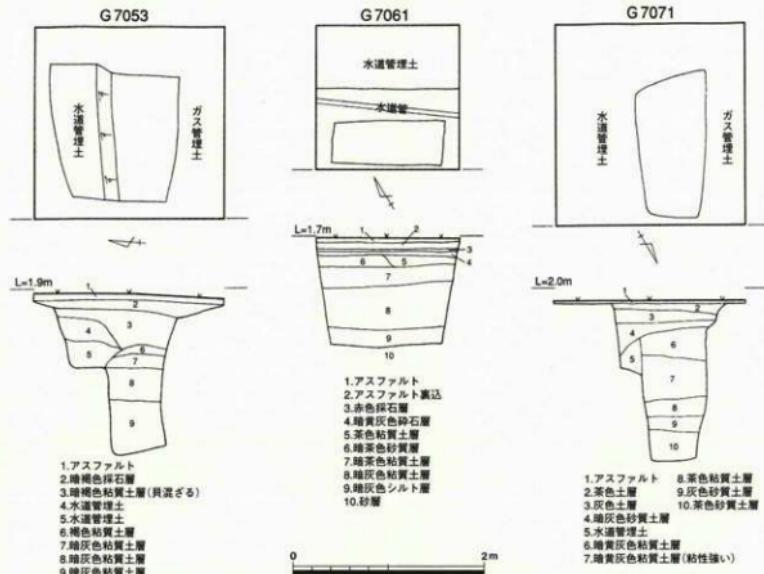
埋設された水道管のため、中央部のみを掘り下げている。暗灰色粘質土層（8）以下が未擾乱である。その下には暗褐色粘質土層（9）、暗褐色砂質土層（10）、暗灰色砂質土層（11）が堆積している。遺物は陶器、磁器、瓦、錢貨が出土している。遺構は確認されていない。

G 7 0 5 2 (第16図)

埋設された水道管のため、中央部のみを掘り下げている。暗褐色礫層（5）以下が未擾乱である。その下には暗褐色粘質土層（6）、暗灰色粘質土層（7）、黄褐色粘質土層（8）、暗灰色粘質土層（9）が堆積している。遺物は陶器（碗）、瓦が出土している。遺構は確認されていない。

G 7 0 5 3 (第17図)

埋設された水道管、ガス管のため、中央部のみを掘り下げている。暗灰色粘質土層（8）以下が未



第17図 下五井館址調査区平面図・断面図一9 (1/50)

攪乱である。その下には暗灰色粘質土層（9）がある。遺物は中世陶器（碗）、陶器が出土している。遺構は確認されていない。

G 7061 (第17図)

埋設された水道管のため、南側のみを掘り下げている。暗茶色粘質土層（7）以下が未攪乱である。その下には暗灰色粘質土層（8）、暗灰色シルト層（9）、砂層（10）が堆積している。遺物は陶器、磁器、瓦が出土している。遺構は確認されていない。

G 7071 (第17図)

埋設された水道管、ガス管のため、中央部のみを掘り下げている。暗黄灰色粘質土層（6）以下が未攪乱である。その下にはやや粘性の強い暗黄灰色粘質土層（7）、茶色粘質土層（8）、灰色砂質土層（9）、茶色砂質土層（10）がある。遺物は陶器（擂鉢）が出土している。遺構は確認されていない。

2. 出土遺物 (第18~24図)

G 5041 (第18図21)

21は下層出土の中世陶器・碗の底部である。高台には粗穀痕が認められ、断面形は台形に近い。調整は内外面ナデ、底部糸切りである。13世紀後半のものと思われる。

G 5042 (第18図22)

22は中世陶器・壺の口縁部破片である。口縁部には1条の突帯が巡らされ、端部は丸い。調整は内外面ナデである。中世のものである。

G 5051 (第18図23~29)

23~28は暗茶色粘質土層出土の土器である。23~25は土師器・壺で、23は頸部破片で調整は外面ナデ、内面ナデ・指押さえ、24は体部破片で外面ハケメ、内面ナデ・板ナデ、25は底部破片であるが調整は摩滅のため不明である。26は土師器・小型高壺である。口縁部は内傾し、端部は面をなして外側に張り出す。調整は内外面ナデである。27・28は土師器・高壺である。27は脚部の破片で、筒部が中膨らみしている。調整は摩滅のため不明であるが、筒部内面に指紋痕が認められる。28は脚部と壺部の接続部破片である。調整は摩滅のため不明。23~28は古墳時代中期のものと思われる。29は陶器・碗である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸い。外面に呉須絵がみられる。調整は内外面回転ナデで、灰釉が掛かっている。近世のものである。

G 5061 (第18図30~33)

30~33は暗茶色粘質土層出土の土師器・皿である。口縁部は外方に立ち上がり、底部は比較的平坦である。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ・板ナデである。中世のものと思われる。

G 5062 (第24図158・159)

158・159は暗茶褐色粘質土層出土の木製品である。158は板状木製品であり、長さ27cmほどの加工された板材である。159は円形の曲物容器の幅2cmほどの側板と思われるが、強く丸まっている。時期は不明である。

G 5063 (第18図34)

34は陶器・皿である。口縁部は内湾氣味に少し立ち上がり、端部は丸い。高台は削り出しである。内面に呉須絵がみられる。調整は内外面回転ナデ、底部ケズリで軸が掛かっている。18世紀代のものであろうか。

G 5 0 6 4 (第18図35)

35は土師器・皿である。口縁部は外方に立ち上がり、端部内面が面をなす。底部は比較的平坦である。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデである。中世のものと思われる。

G 5 0 7 1 (第18図36~38)

36・37は土師器・皿である。口縁部は外方に立ち上がり、端部内面が面をなし、36は内面に沈線状の窪みが巡っている。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ・板ナデである。中世のものである。38は土師器・鍋である。いわゆる「く」字状口縁の内耳鍋である。口縁端部はナデ窪められている。調整は内外面ナデである。15~16世紀代のものであろうか。

G 5 0 7 2 (第18図39~48)

39~43はSK-1出土の土器である。39は陶器・碗の底部破片である。削り出し高台であり、調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデで、内外面に灰釉が掛かる。近世のものである。40は陶器・擂鉢である。口縁部は外傾し、端部付近で小さく屈曲する。端部は丸い。調整は内面回転ナデでクシメが入れられ、外面は回転ナデである。内外面に鉄釉が掛かる。18世紀後半のものである。41・42は土師器・皿である。口縁部は外方に立ち上がり、端部内面が面をなす。底部は比較的平坦である。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ・板ナデである。近世のものか。43は土師器・鍋である。いわゆる半球状の内耳鍋である。口縁端部はナデ窪められている。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデである。16~17世紀のものか。

44・45は下層出土の土器である。44は陶器・擂鉢である。口縁部は外傾し、端部付近で小さく膨らむ。端部は丸い。調整は内面回転ナデでクシメが入れられ、外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、底部は糸切りである。内外面に鉄釉が掛かる。18世紀前葉のものである。45は土師器・鍋である。口縁部が内湾する内耳鍋で、端部はナデ窪められている。調整は外面ナデ・指押さえ・ヘラケズリ、内面ナデ・板ナデ・指押さえである。18~19世紀代のものであろうか。

46~48は上層出土の土器である。46は陶器・皿である。いわゆる菊皿の底部破片である。調整は内外面回転ナデ、底部回転ナデで、全体に灰釉が掛かっている。16世紀代のものであろうか。47・48は土師器・皿である。口縁部は外方に立ち上がり、端部は丸い。底部は比較的平坦である。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ・板ナデである。近世のものか。

G 5 1 0 1 (第19図49~62・第24図160~163)

49~51はSK-1出土の土器である。49・50は中世陶器・碗である。49は外反する口縁部破片であり、調整は内外面回転ナデである。12~13世紀代のものである。50は底部で、高台には初期痕が認められる。調整は内外面ナデ、底部糸切りである。13世紀中葉頃のものと思われる。51は陶器・擂鉢である。体部は外傾し、底部は平坦である。調整は内面回転ナデでクシメが入れられ、外面は板ナデである。底部は糸切り。内外面に鉄釉が掛かる。近世のものである。

52~55はSE-1出土の土器である。52は陶器・碗である。口縁部は内湾氣味に立ち上がり、端部

は丸い。底部は削り出し高台である。調整は内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリで、鉄釉が掛かっている。18世紀代のものである。53は磁器・鉢である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は面をなす。調整は内外面回転ナデで、灰釉が掛かっている。19世紀代のものである。54・55は土師器・鍋である。口縁部が内湾する内耳鍋で、端部はナデ窪められている。調整は外面ナデ・指押さえ・ヘラケズリ、内面板ナデである。18~19世紀代のものか。160~163はS E - 1出土の木製品である。160は曲物の底板と思われ、欠損しているが、厚さ0.7cmの針葉樹と思われる材を円形に加工したようである。161~163は井戸枠の側板である。長さ35cm、厚さ1cm程に加工して井戸枠に加工したようである。時期は19世紀代のものと思われる。

56は中世陶器・碗である。底部で破片で、高台の断面形はやや丸い。底部に「水」？または記号の墨書きがみられる。調整は内外面ナデ、底部糸切りである。13世紀中葉頃のものと思われる。57は陶器・碗である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸い。底部は削り出し高台である。調整は内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリで、灰釉が掛かっている。近世のものである。58は陶器・皿である。口縁部は内湾気味に少し立ち上がり、端部は丸い。高台は削り出しである。調整は内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリで灰釉が掛けている。16~17世紀代のものであろうか。59は陶器・鉢と思われるものである。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部はやや丸い。底部は削り出し高台である。調整は内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリで、灰釉が掛けている。18世紀代のものである。60は陶器・鉢、いわゆる片口鉢である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部はやや面をなす。口縁部には注ぎ口が1箇所ついている。底部は削り出し高台である。調整は内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリで、灰釉が掛けている。18世紀代のものである。61は土師器・皿である。口縁部は外方に立ち上がり、端部は丸い。底部は比較的平坦である。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ・板ナデである。近世のものと思われる。62は土師器・鍋である。いわゆる半球状の内耳鍋である。口縁端部はナデ窪められている。調整は外面ナデ・指押さえ、内面板ナデである。18世紀代のものであろうか。

G 5 1 2 1 (第19図63)

63は褐色シルト層出土の土師器・皿である。口縁部は外方に立ち上がるが端部付近でやや外反し、端部は尖る。底部は平坦である。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ・板ナデである。近世のものと思われる。

G 5 1 2 2 (第19図64)

64はSK - 1出土の陶器・皿である。いわゆる口縁部周辺に鉄釉の付く縁釉陶器であり、口縁部は外方に立ち上がるが端部付近でやや外反し、端部は丸い。底部は平坦である。調整は内外面回転ナデ、底部は糸切りである。15世紀代のものと思われる。

G 5 1 2 3 (第19図65)

65は暗褐色シルト層出土の陶器・碗の底部破片である。底部は削り出し高台で、調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデである。近世のものと思われる。

G 5 1 2 4 (第19図66・67)

66・67は褐色土層出土の土器である。66は磁器・碗の底部破片である。いわゆる小碗であり、底部

は削り出し高台で、調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデである。19世紀以降のものと思われる。

67は磁器・鉢であり、口縁は端部付近で外反し、端部は肥厚させられて面をなす。調整は内外面回転ナデで、灰釉が掛かる。内面には波状文が施されている。19世紀前葉のものである。

G 5 1 2 5 (第19図68)

68は銭貨である。文字が潰れていて全部は判読できないが、「○元○寶」と読むことができ、篆書の熙寧元寶（北宋）か紹聖元寶（北宋）の可能性が考えられる。

G 5 1 3 1 (第19図69)

69は暗茶色粘土層出土の須恵器・壺である。外反する頸部破片であり、調整は内外面回転ナデである。古代のものである。

G 5 1 7 1 (第20図70・71)

70は陶器・鉢の底部破片である。底部は削り出し高台で、調整は外面回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面回転ナデで、灰釉が掛かる。近世のものと思われる。71は磁器・碗である。いわゆる腰折碗で、口縁部は直立して端部は尖る。底部は削り出し高台で、調整は内外面回転ナデであり、吳須絵が描かれている。19世紀前葉のもの。

G 5 1 7 2 (第20図72~80)

72~80は黒褐色混貝土層出土の遺物である。72・73は土師器・皿である。72は口縁部が外方に立ち上がり、端部は丸い。底部は比較的平坦である。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ・板ナデである。73は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は尖る。底部は比較的丸い。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ・指押さえである。74は土師器・擂鉢の底部破片である。底部は平坦で、内面にヘラによる沈線列が施されるが、使用による摩滅で消えかかっている。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ、底部ナデである。75~79は土師器・鍋である。75はいわゆる「く」字状の内耳鍋である。口縁端部は丸い。調整は外面ナデ・板ナデ・指押さえ、内面ナデ・板ナデである。76は口縁部が緩く屈曲する内耳鍋である。口縁端部はナデ窪められている。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ・板ナデである。77~79はいわゆる半球状の内耳鍋である。口縁端部はナデ窪められている。調整は外面ナデ・指押さえで底部付近はヘラケズリ、内面板ナデである。80は砥石である。大きく5面が認められ、各面を擦った痕跡がある。さて、72~80の時期であるが、内耳鍋の組み合わせから考えると16世紀中葉頃と考えられる。

G 5 1 7 3 (第20図81~84)

81~84は黄褐色シルト層出土の土器である。81・82は中世陶器・碗である。81は口縁部破片で端部が尖る。調整は内外面回転ナデである。82は底部で、高台は潰れて痕跡程度であり、調整は内外面ナデ、底部糸切りである。81・82は14世紀頃のものと思われる。83は陶器・碗の底部破片である。底部は削り出し高台で、調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデで、灰釉が掛かる。19世紀代のものと思われる。84は陶器・鉢の口縁部破片である。いわゆる練鉢で、口縁端部は肥厚してあり丸い。調整は内外面回転ナデであり、柿釉が掛かっている。19世紀前半のものと思われる。

G 5 1 7 4 (第20図85~87)

85~87は黒褐色粘土出土の土器である。85は中世陶器・碗の口縁部破片で、端部が丸い。調整は内

外面回転ナデである。13~14世紀のものであろうか。86は磁器・碗の底部破片である。いわゆる広東茶碗であり、底部は削り出し高台で、調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデで、灰釉が掛かる。内外面に呉須絵がみられる。19世紀中葉のものと思われる。87は土師器・皿である。87は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は尖る。底部は比較的平坦である。体部に焼成後の穿孔が2箇所認められる。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデである。近世のものと思われる。

G 5 1 8 2 (第21図88)

88は陶器・碗である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸い。調整は内外面回転ナデで、灰釉が掛かっている。近世のものである。

G 5 1 8 3 (第21図89)

89は暗灰色粘質土層出土の陶器・碗である。いわゆる小碗の底部破片であり、底部は削り出し高台で、調整は内外面回転ナデで、灰釉が掛かる。近世のもの。

G 5 2 1 1 (第21図90)

90は中世陶器・碗の底部で、高台は潰れて痕跡程度であり、調整は内外面ナデ、底部糸切りである。13世紀後葉のものと思われる。

G 5 2 1 2 (第21図91)

91は茶褐色砂質土層出土の陶器・皿の底部破片である。底部は削り出し高台で、調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデで、灰釉が掛かる。近世のものと思われる。

G 5 2 1 3 (第21図92)

92は陶器・碗の底部破片である。天目茶碗であり、底部は削り出し高台である。調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデで、鉄釉が掛かる。17世紀代のものと思われる。

G 5 2 1 5 (第21図93~97)

93~95は上層出土の土器である。93は中世陶器・碗の底部で、高台は潰れて低く、調整は内外面ナデ、底部糸切りである。14世紀前後のものと思われる。94は陶器・鉢の底部破片である。底部は削り出し高台で、調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデで、灰釉が掛かる。近世のものである。95は陶器・擂鉢である。口縁部は外傾し、端部付近で小さく屈曲する。端部は丸い。調整は内面回転ナデでクシメが入れられ、外面は回転ナデ・回転ヘラケズリである。内外面に鉄釉が掛かる。18世紀中葉のものである。

96・97は下層出土の土器である。96は陶器・皿である。いわゆる菊皿で、口縁部は内湾気味に少し立ち上がり、口縁端部を指で押さえて花弁状にしている。調整は内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリで灰釉が掛かっている。17世紀後葉のものであろうか。97は土師器・鍋である。いわゆる「く」字状の内耳鍋で、口縁端部はナデ窪められている。調整は外面ナデ・板ナデ、内面ナデ・板ナデである。16世紀代のものであろうか。

G 5 2 2 4 (第21図98)

98は中世陶器・碗の底部破片である。細くて低い高台が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデ、底部糸切りである。13世紀後葉のものと思われる。

G 5 2 2 5 (第21図99・100)

99は灰釉陶器・皿の口縁部破片である。口縁部は外傾し、端部は丸い。調整は内外面回転ナデである。古代のものである。100は陶器・ひょうそくの底部破片である。体部は強く括れ、底部は平坦で中央が窪む。調整は内外面回転ナデ、底部糸切りで、鉄軸が掛けられている。19世紀代のものと思われる。

G 5 2 3 3 (第21図101)

101は磁器・仏飯器である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は尖る。調整は内外面回転ナデで、外面に呉須絵がみられる。19世紀代のものと思われる。

G 5 2 4 1 (第21図102~105)

102~104は暗茶色粘質土層から出土した土器である。102は陶器・壺の口縁部破片である。いわゆる常滑の壺であり、口縁部に縁帯が巡らされる。調整は内外面回転ナデである。近世のものであろうか。103は土師器・皿である。口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は丸い。調整は外面ナデ、内面板ナデである。近世のものである。104は土師器・鍋である。いわゆる半球状の内耳鍋で、口縁端部はナデ窪められている。調整は外面ナデ・指押さえ、内面板ナデである。近世のものである。

105は磁器・碗である。いわゆる広東茶碗の底部であり、体部の立ち上がりが強く、高台は高く先端は尖る。調整は内外面回転ナデで、外面に呉須絵がみられる。19世紀中葉のものと思われる。

G 5 2 5 2 (第21図106)

106は暗茶褐色粘質土層出土の磁器・碗の底部破片である。削り出し高台で、高台は丈高である。内面に呉須絵がみられる。調整は内外面回転ナデである。19世紀代のものと思われる。

G 6 1 8 1 (第21図107~110)

107~110は暗褐色粘質土層出土の土器である。107は土師器・壺である。口縁部はやや外傾して立ち上がり、端部は尖る。調整は摩滅のため不明。108は土師器・高坏である。坏部の底付近で、強く屈折している。調整は外面ミガキ、内面不明である。109・110は土師器・台付壺である。109は脚部と体部の接続部破片である。調整は外面ハケメ、内面ナデである。110は「ハ」字状に開く脚部であり、調整は外面ハケメ、内面板ナデである。これらは古墳時代前期のものと思われる。

G 6 1 9 1 (第21図112・113)

112・113は陶器・碗の底部破片である。削り出し高台で、灰釉が掛けられている。調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデである。近世のものと思われる。

G 6 1 9 3 (第21図114)

114は陶器・碗の底部破片である。削り出し高台で、灰釉が掛けられている。調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデである。17世紀後半~18世紀前半のものと思われる。

G 6 2 0 1 (第21図115~第22図120)

115は土師器・壺の底部である。底付近は比較的急に立ち上がり、体部に向けて広がる。調整は外面ナデ、内面板ナデ、底は摩滅のため不明である。古墳時代のものと思われる。116は陶器・擂鉢である。口縁部は外傾し、端部が肥厚され縁帯をなしている。調整は内面回転ナデでクシメが入れられ、外面は回転ナデである。内外面に鉄軸が掛かる。17世紀中葉のものである。117は中世陶器・壺の肩部付近の破片である。いわゆる常滑の壺で、押印文が入れられている。調整は外面回転ナデ、内面板ナデ・指押さえである。16世紀代のものと思われる。118は土師器・皿である。口縁部は外方に立ち

上がるが端部付近で外反し、端部は尖る。底部は比較的平坦である。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ・板ナデである。近世のものであろうか。119・120は土師器・鍋である。119は口縁部が緩く屈曲する内耳鍋である。口縁端部は面をなしている。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ・板ナデである。16世紀～17世紀のものと思われる。120はいわゆる半球状の内耳鍋である。口縁端部はナデ窪められている。調整は外面ナデ・指押さえ、内面板ナデである。16～18世紀代のものである。

G 6 2 0 2 (第22図121～123)

121～123は黄褐色粘質土層から出土した土器である。121は磁器・碗である。いわゆる広東茶碗の底部であり、体部の立ち上がりが強く、高台は高く先端は丸い。調整は内外面回転ナデで、内外面に呉須絵がみられる。19世紀中葉のものと思われる。122は陶器・鉢である。常滑のものと思われ、口縁部に丈高の縁帯が巡らされる。調整は外面回転ナデ、内面は板ナデ・指押さえである。近世のものであろうか。123は土師器・皿である。口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部はやや丸い。調整は外面ナデ・指押さえ、内面板ナデである。近世のものであろうか。

G 6 2 1 1 (第22図124・125)

124は黄褐色粘質土層から出土した土師器・皿である。口縁部は内湾気味に低く立ち上がり、端部はやや尖る。調整は外面ナデ・指押さえ、内面板ナデである。近世のものであろうか。

125は青灰色粘土層出土の土玉である。最大径2.8cmの球状をなし、径5mmの穿孔がみられる。弥生時代～古墳時代のものであろうか。

G 7 0 5 1 (第22図126)

126は錢貨である。寛永通寶であり、裏面に「文」の文字が入っている。17世紀以降のものである。

G 7 0 5 2 (第21図127)

127は陶器・碗の底部破片である。削り出し高台で、灰釉が掛けられている。調整は内外面回転ナデである。近世のものと思われる。

G 7 0 5 3 (第22図128～130)

128・129は中世陶器・碗の底部破片である。丈が低く断面形が蒲鉾形に近い高台が貼り付けられている。高台には初穀痕が認められる。調整は内外面回転ナデ、底部糸切りである。13世紀後葉のものと思われる。130は陶器・碗の底部破片である。削り出し高台で、灰釉が掛けられている。調整は内外面回転ナデである。近世のものと思われる。

G 7 0 6 1 (第22図131・132)

131は中世陶器・壺である。常滑の底部であり、底は平坦である。調整は外面板ナデ・回転ナデ、内面は回転ナデ・ハケメ、底は未調整である。中世のものであろうか。132は磁器・碗である。いわゆる広東茶碗の底部であるが、高台を欠損している。調整は内外面回転ナデで、外面に呉須絵がみられる。19世紀代のものと思われる。

G 7 0 7 1 (第22図133)

133は陶器・擂鉢である。口縁部は外傾し、端部は肥厚させられて丸い。調整は内内面回転ナデである。内外面に鉄軸が掛かる。17世紀後葉のものであろうか。

立会出土土器 (第22図134～第23図157)

134・135はG 5 0 5 1～G 5 0 6 1間の茶褐色土層から出土した土器である。134は土師器・高坏である。坏部は底面に明確な後が認められ、坏底部よりやや内溝して立ち上がり口縁端部にいたる。口縁端部には内傾面が認められた。脚部はやや外反しながら「ハ」字状に開き、端部は丸い。スカシ穴は3方向で認められた。調整は全体的に摩滅が著しくて不明であるが、脚部内面にハケメ・板ナデが認められた。古墳時代前期のものである。135は陶器・花生の底部破片である。底部は円盤状をなし、体部に向かって括れて再び膨らんでいる。鉄軸が掛けられている。調整は内外面回転ナデ、底部糸切りである。18～19世紀代のものと思われる。

136～138はG 5 0 5 1～G 5 0 6 1間の貝層から出土した土器である。136・137は陶器・碗である。136は底部は削り出し高台で、体部は丸く膨らむ。鉄軸が掛けられている。調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデである。17世紀後半～18世紀前葉のものと思われる。137は底部は削り出し高台で、体部は丸く膨らむ。灰軸が掛けられている。調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデである。18世紀～19世紀前葉のものと思われる。138は陶器・皿である。いわゆる菊皿で、口縁部は内湾気味に少し立ち上がり、口縁端部を指で押さえて花弁状にしている。高台は断面台形で貼り付けられている。調整は外面回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面回転ナデ、底部回転ヘラケズリである。灰軸が掛かっている。17世紀中葉のものと思われる。

139・140はG 5 0 5 1～G 5 0 6 1間の排土中から出土した土器である。139は陶器・水鉢と思われるものである。口径は広くて口縁部は強く外反し、端部は尖る。調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデである。灰軸が掛かっている。近世のものと思われる。140は土師器・皿である。口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部はやや丸い。調整は外面ナデ・指押さえ、内面板ナデである。近世のものであろうか。

141～149はG 5 0 7 1～G 5 0 7 4間から出土した土器である。141・142は陶器・碗である。141は口縁部はまっすぐ立ち上がり、端部は丸い。調整は内外面回転ナデで、鉄軸が掛かる。17世紀代のものと思われる。142はいわゆる天目茶碗であり、底部は削り出し高台で、底から体部へは直線的に広がる。調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデで、鉄軸が掛かっている。17世紀中葉のものであろう。143は陶器・壺である。常滑のものと思われ、底部は平坦で底から体部へは直線的に広がる。調整は外面板ナデ、内面回転ナデ、底部は未調整である。内外面に鉄軸が掛かっている。近世のものであろうか。144は陶器・擂鉢である。口縁部は外傾し、端部は肥厚させられて面をなす。調整は内面回転ナデである。内外面に鉄軸が掛かる。19世紀前葉のものと思われる。145は陶器・壺の底部である。底部は平坦で底から体部へ直線的に広がる。調整は外面ヘラケズリ、内面回転ナデ、底部は未調整である。近世のものと思われる。146・147は土師器・皿である。146は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は丸い。底部は比較的平坦である。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ・板ナデである。近世のものであろうか。147は口縁部は屈曲して立ち上がり、端部は尖る。底部は比較的平坦であるが、中央部分が膨らんでいる。調整は内外面板ナデ、底部ナデ・指押さえである。近世のものか。148・149は土師器・鍋である。148はいわゆる半球状の内耳鍋である。口縁端部は面をなしている。調整は外面ナデ・指押さえ、内面ナデ・板ナデである。16～18世紀代のものである。149はいわゆる「く」字状の内耳鍋である。口縁端部はナデ窪められている。調整は外面ナデ・ハケメ・ヘラケズリ、内面

ナデ・板ナデである。15~16世紀代のものである。

150・151はG 5 0 7 4~G 5 0 7 5間から出土した土器である。150は陶器・碗である。いわゆる天目茶碗であり、口縁部は端部付近で屈曲し、端部は丸い。体部は直線的で底部に続き、底部は削り出し高台である。調整は外回転ヘラケズリ、内回転ナデで、鉄軸が掛かっている。17世紀後葉のものであろう。151は磁器・碗である。中国からの輸入磁器と思われ、口縁部は端反して端部は丸い。高台は細く尖る。調整は内外回転ナデで、具須絵がみられる。中世のものと思われる。

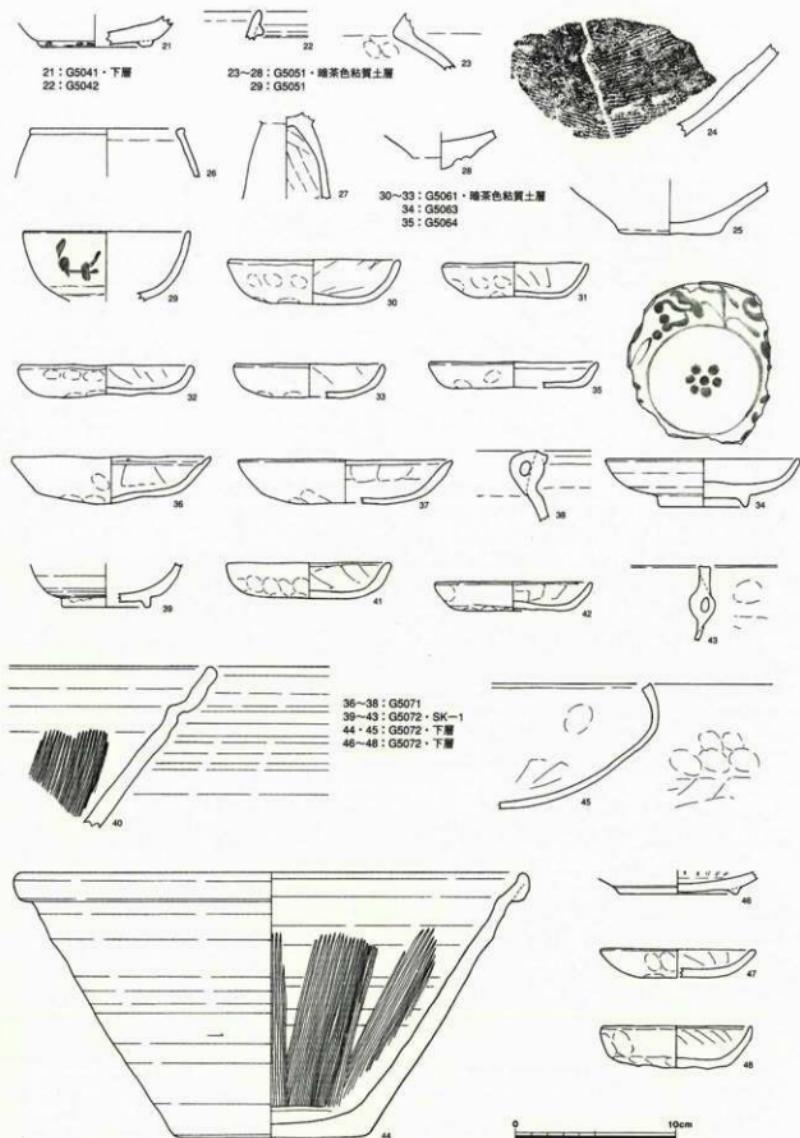
152はG 5 0 7 4~G 5 0 7 5間の茶褐色土層から出土した土師器・鍋である。いわゆる「く」字状の内耳鍋である。口縁端部はナデ窪められている。調整は外回転ナデ・指押さえ・ヘラケズリ、内回転ナデ・板ナデ・指押さえである。15~16世紀代のものであろうか。

153はG 5 2 1 2~G 5 2 1 3間の茶褐色土層から出土した陶器・碗である。口縁部はまっすぐ立ち上がり、端部は丸い。調整は外回転ナデ・回転ヘラケズリ、内回転ナデで、釉が掛かる。近世のものである。

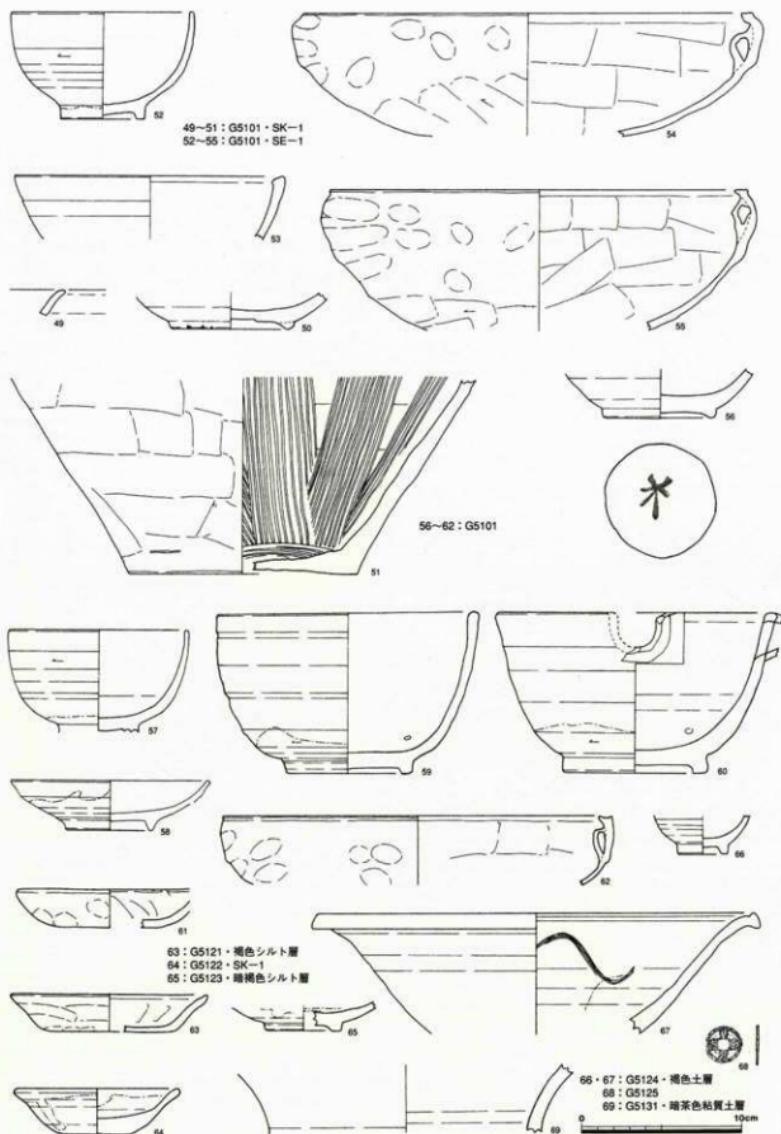
154・155はG 6 1 7 1西側の暗灰色粘質土層から出土した土器である。154は陶器・皿である。口縁部は端反して端部は尖る。調整は外回転ナデ・回転ヘラケズリ、内回転ナデで、鉄軸が掛かる。15世紀代のものと思われる。155は土師器・皿である。小型のもので、口縁部は内済気味に立ち上がり、端部は尖る。底部は比較的丸いである。調整は外回転ナデ・指押さえ、内面ナデである。近世のものであろうか。

156はG 6 2 0 3~G 6 2 1 1間から出土した中世陶器・碗である。底部破片で、断面台形の高台が貼り付けられている。調整は内外回転ナデ、底部糸切りである。13世紀前葉のものと思われる。

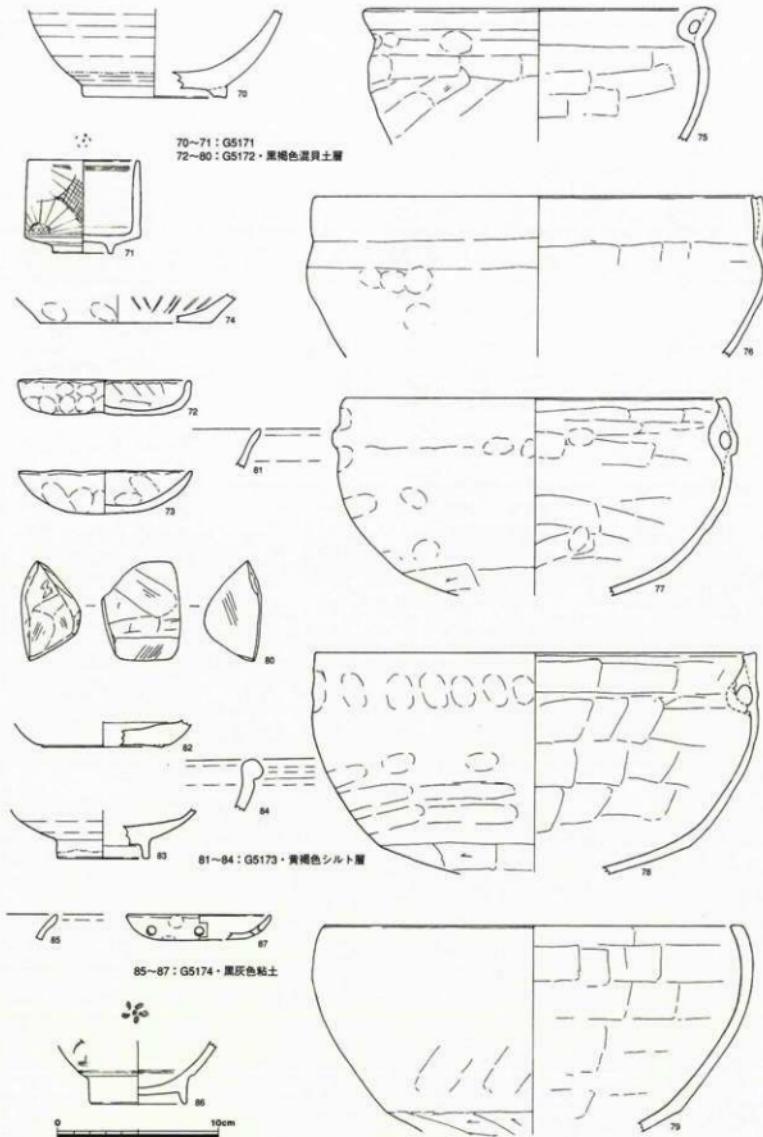
157は表採品の中世陶器・壺である。口縁部を欠損するが、頸部は括れて体部は膨らむ。底部は平坦である。調整は外回転ナデ、内面板ナデ・指押さえ、底部未調整である。13~15世紀代のものであろうか。



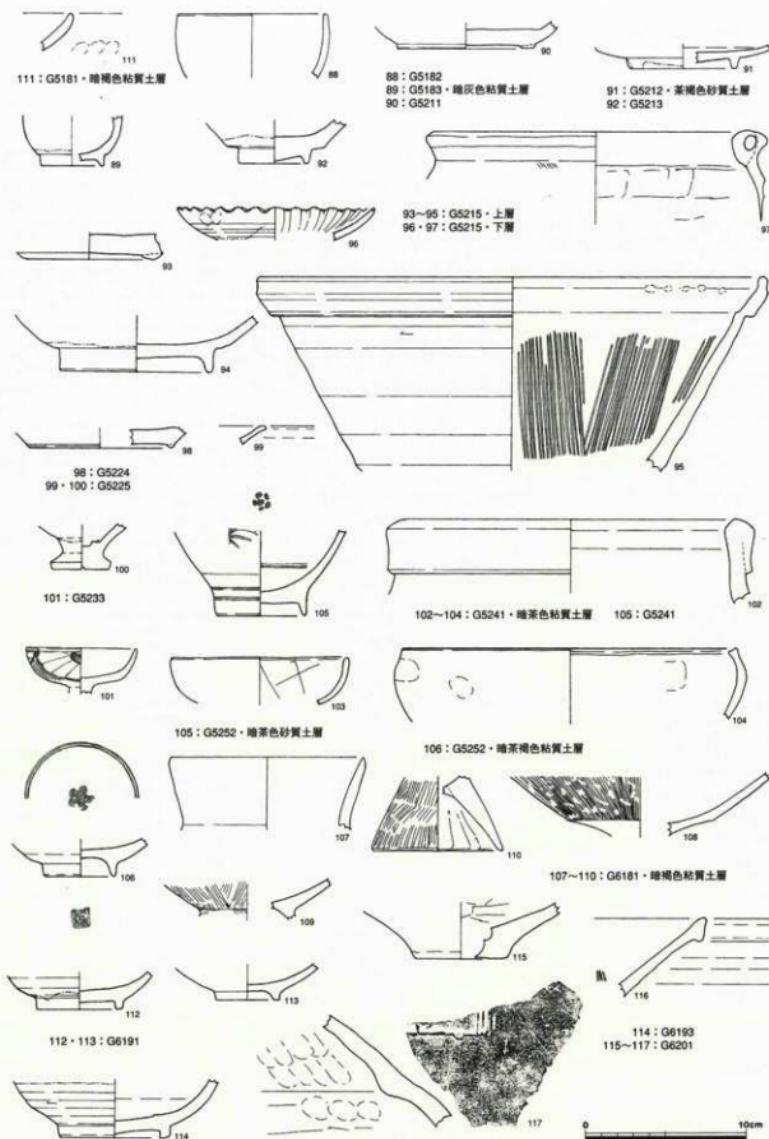
第18図 下五井館址出土遺物実測図一 (1/3)



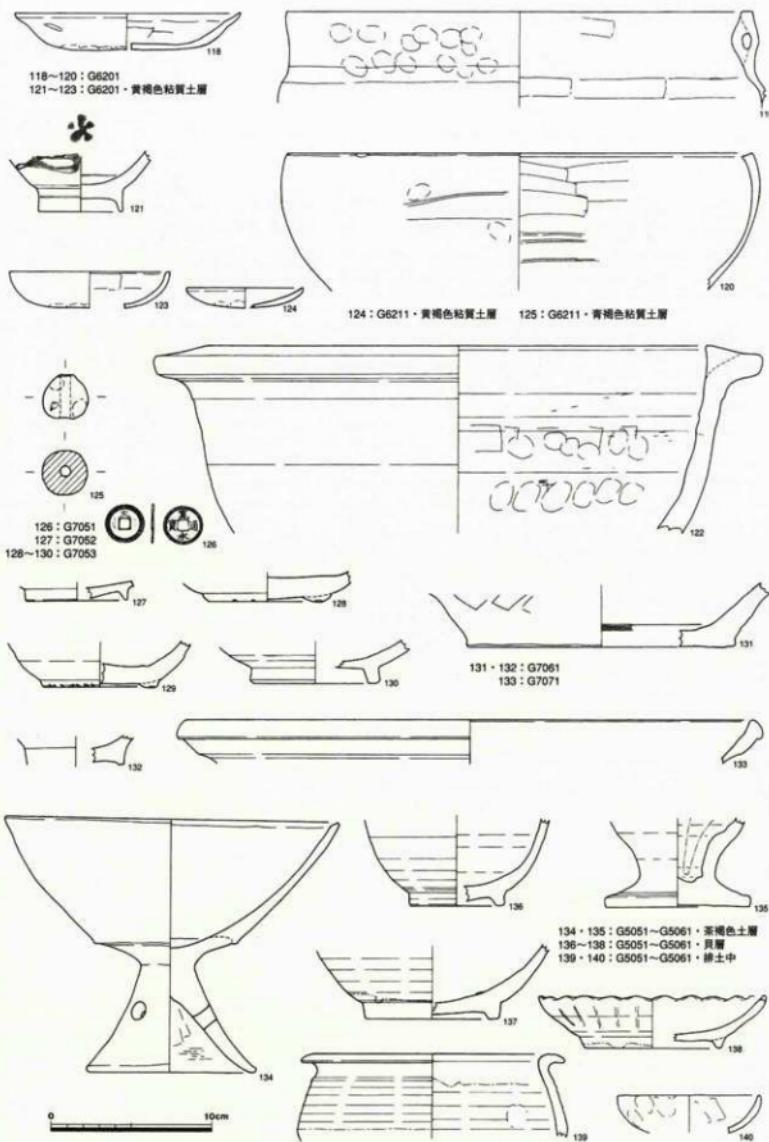
第19図 下五井館址出土遺物実測図-2 (1/3)



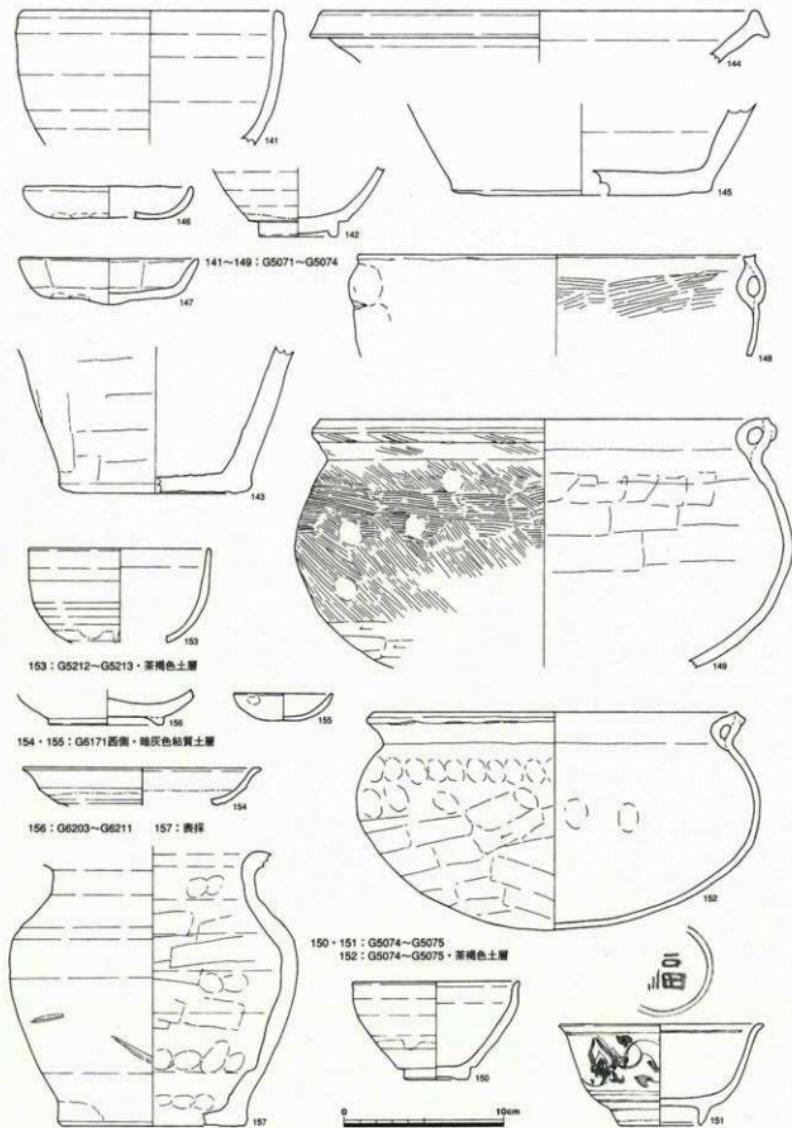
第20図 下五井館址出土遺物実測図一3 (1/3)



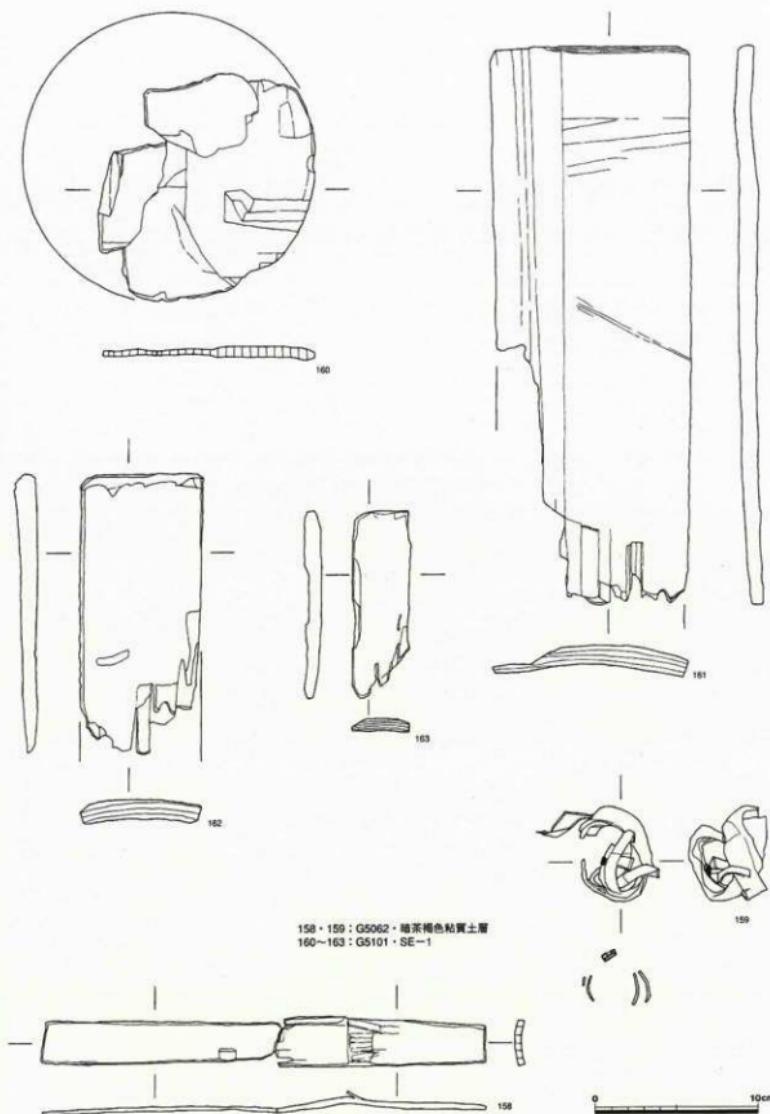
第21図 下五井館址出土遺物実測図-4 (1/3)



第22図 下五井館址出土遺物実測図-5 (1/3)



第23図 下五井館址出土遺物実測図-6 (1/3)



第24図 下五井館址出土遺物実測図-7 (1/3)

第5章 天王遺跡・宗正遺跡

天王遺跡内の調査は、遺跡の南部分の市道であり、9箇所(45m²)のマンホール部分を発掘調査した(第25図)。宗正遺跡内の調査は、遺跡内では1箇所(5m²)のマンホールしか設定されていないため、この部分を発掘調査したのみである(第25図)。両遺跡ともマンホール間の下水管埋設部分についても立会調査を行っている。ここでは遺構・遺物の出土しているものを中心説明する。なお、宗正遺跡からは遺物は出土していない。

1. 調査グリッドの概要 (第25~28図)

A. 天王遺跡 (第26・27図)

G 6012 (第26図)

埋設された水道管、ガス管のため、中央部のみを掘り下げている。暗黄灰色シルト層(6)以下が未擾乱である。その下にはやや粘性の強い暗黄灰色シルト層(7)、黄茶色砂層(8)、黄灰色シルト層(9)、灰色シルト層(10)がある。遺物、遺構は確認されていない。

G 6013 (第26図)

埋設された水道管のため、南側を掘り下げている。碎石下には暗茶色土層(4)があり、以下は黄灰色砂質土層(5)、暗黄灰色粘質土層(6)、灰色粘質土層(7)、淡茶色粘質土層(8)がある。遺物、遺構は確認されていない。

G 6014 (第26図)

埋設された水道管のため、中央部のみを掘り下げている。淡茶色シルト層(5)以下が未擾乱である。その下には灰色砂層(6)、暗灰色シルト層(7)、灰色砂質土層(8)がある。遺物、遺構は確認されていない。

G 6015 (第26図)

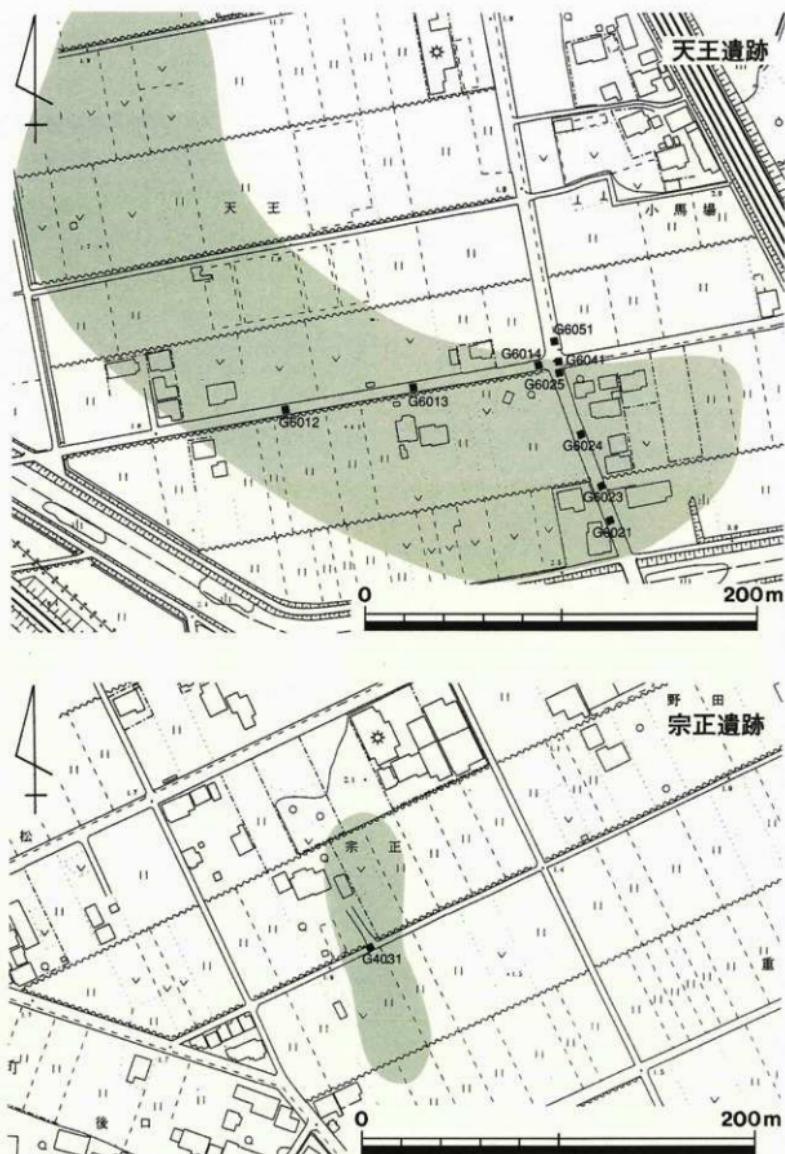
造成土下の灰色シルト層(5)が旧表土と思われる。その下には茶色シルト層(6)、灰色砂層(7)、暗灰色シルト層(8)、灰色砂質土層(9)がある。遺物、遺構は確認されていない。

G 6021 (第26図)

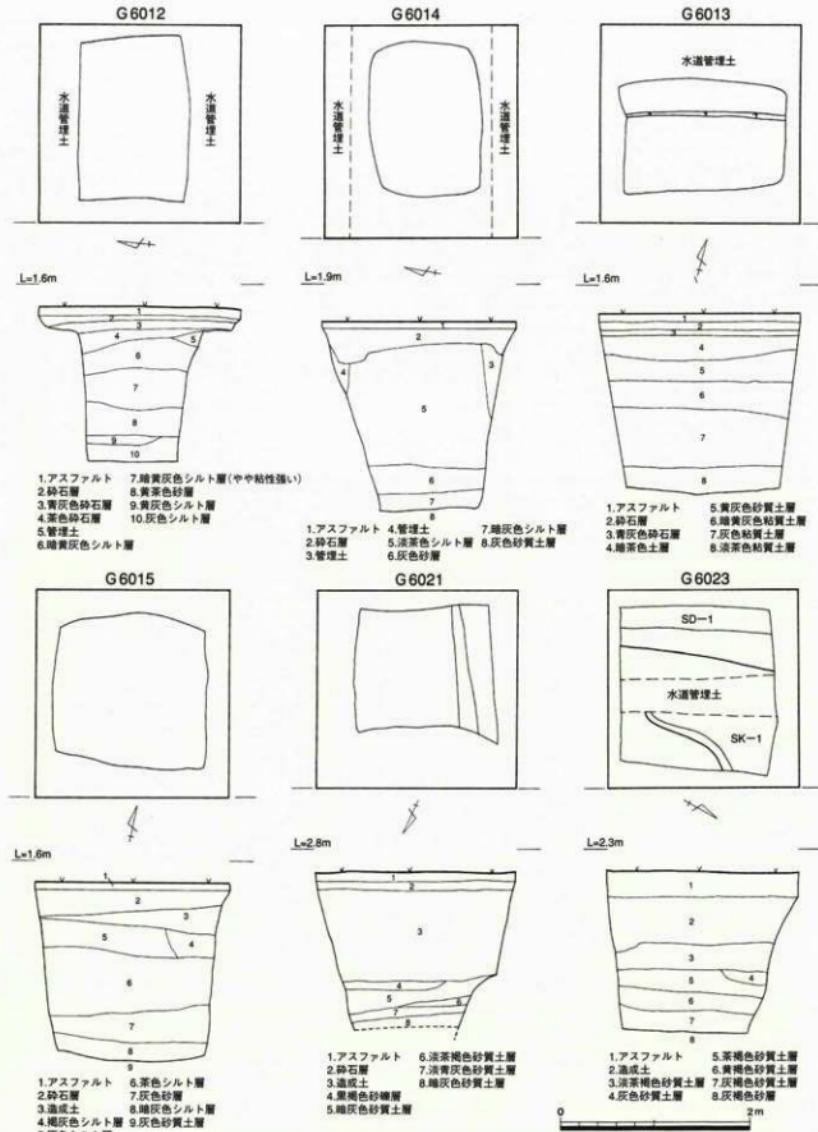
造成土下の暗灰色砂質土層(5)が旧表土と思われる。その下には淡青灰色砂質土層(7)があるが、間層として淡茶褐色砂質土層(6)が入っている。淡青灰色砂質土層(7)下には暗灰色砂質土層(8)で須恵器(壺)、土師器(甕)が出土したが、掘削深度がここまでであったのでこの層を完掘していない。遺構は確認されていない。

G 6023 (第26図)

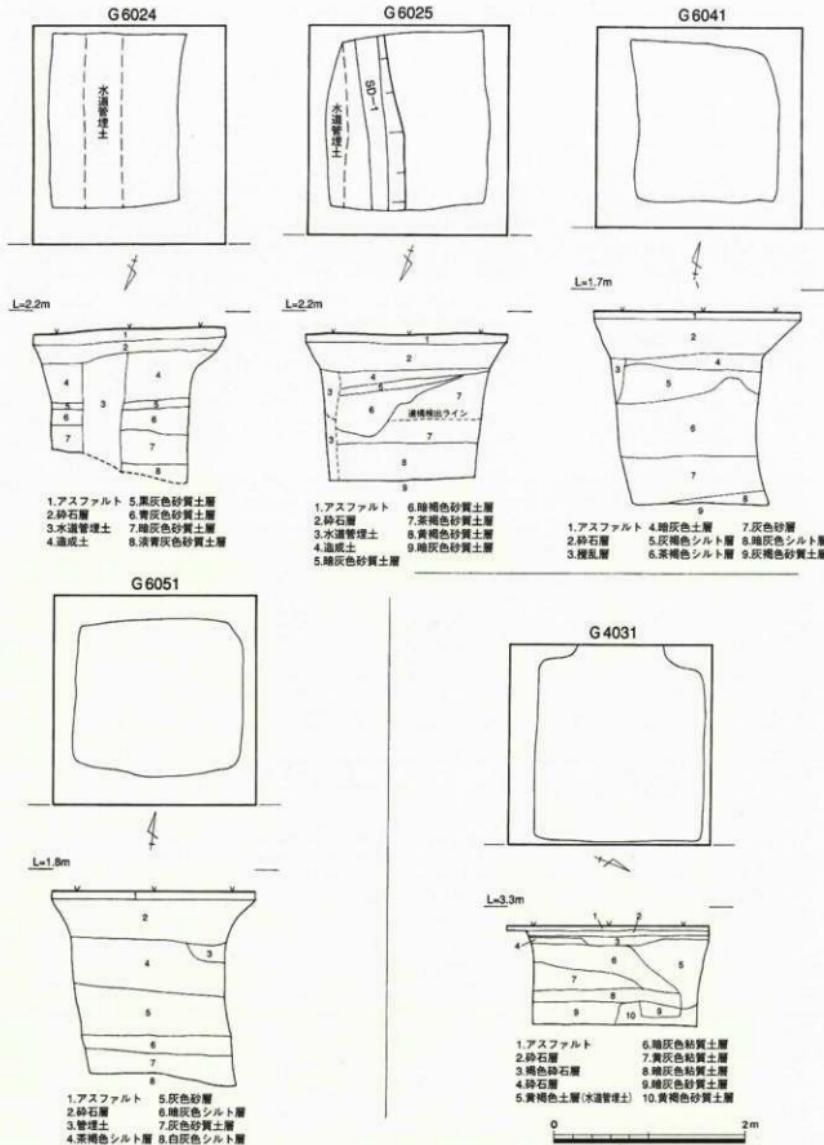
グリッド中央に水道管が埋設されている。造成土下の淡茶褐色砂質土層(3)が旧表土と思われる。その下には茶褐色砂質土層(5)があり、この層をSK-1、SD-1が掘り込んでいる。SK-1



第25図 天王遺跡・宗正遺跡調査区位置図 (1/2,500)



第26図 天王遺跡調査区平面図・断面図 (1/50)



第27図 天王遺跡・宗正遺跡調査区平面図・断面図 (1/50)

は長さ1.4m以上、深さ19cmの土壤であるが、水道管埋設時に壊されていて平面形は不明である。S D - 1 は長さ1.6m以上、幅60cm以上、深さ32cmの溝であり、溝内から須恵器、土師器（壺）が出土している。茶褐色砂質土層（5）の下は黄褐色砂質土層（6）、灰褐色砂質土層（7）、灰褐色砂層（8）が堆積していた。

G 6 0 2 4 (第27図)

グリッド中央に水道管が埋設されている。造成土下の黒灰色砂質土層（5）が旧表土と思われる、その下は青灰色砂質土層（6）、暗灰色砂質土層（7）、淡青灰色砂質土層（8）の順で堆積していた。掘削深度に達したため淡青灰色砂質土層（8）は完掘していない。遺物、遺構は確認されていない。

G 6 0 2 5 (第27図)

造成土下には茶褐色砂質土層（7）あり、この層を S D - 1 が掘り込んでいる。S D - 1 は長さ1.8m以上、幅1.4m以上、深さ50cmの溝である。茶褐色砂質土層（7）は遺物包含層であり、須恵器（壺）が出土している。この下は黄褐色砂質土層（8）、暗灰色砂質土層（9）が堆積していた。

G 6 0 4 1 (第27図)

碎石層下には暗灰色土層（4）が旧表土と思われる。その下には灰褐色シルト層（5）があり、茶色シルト層（6）と続く。茶褐色シルト層（6）の断面をみると緩やかに窪んでおり、溝等の遺構があった可能性もある。その下は灰色砂層（7）、暗灰色シルト層（8）、灰褐色砂質土層（9）と堆積している。遺物は出土していない。

G 6 0 5 1 (第27図)

碎石層下には茶褐色シルト層（4）があり、その下には灰色砂層（5）、暗灰色シルト層（6）、灰褐色砂質土層（7）、白灰色シルト層（8）がある。遺物、遺構は確認されていない。

B. 宗正遺跡

G 4 0 3 1 (第27図)

北側部分に水道管が埋設されており、一部が攪乱されている。碎石下には暗灰色砂質土層（6）があり、旧表土と思われる。以下、黄灰色粘質土層（7）、暗灰色粘質土層（8）と堆積しているが、その下には黄褐色砂質土層（10）に暗灰色砂質土層（9）が掘り込まれたように入っており、遺構があった可能性が考えられる。遺物は出土していない。

2. 出土遺物

A. 天王遺跡 (第28図)

G 6 0 2 1 (第28図164・165)

164・165は暗灰色砂質土層から出土した土器である。164は土師器・壺と思われる口縁部破片で、端部に面取りされている。調整は内外面ナデである。165は須恵器・壺である。細口壺の頸部破片と

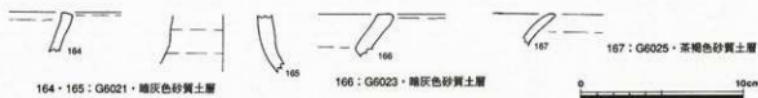
思われ、内外面に回転ナデ調整がされている。これらは古代のものと思われる。

G 6 0 2 3 (第28図166)

166は土師器・壺の口縁部破片である。口縁部はく字状に屈折し、端部は面取りされている。調整は内外面ナデである。暗灰色砂質土層出土。古代のものである。

G 6 0 2 5 (第28図167)

167は茶褐色砂質土層から出土した須恵器・壺の口縁部破片である。口縁部は外反し、端部は尖る。調整は内外面回転ナデである。古代のものと考えられる。



第28図 天王遺跡出土遺物実測図 (1/3)

第2表 出土遺物観察表

遺物 No.	遺跡名	グリッド 番号	層位・構造	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等
1	瓜郷遺跡	G4221	上層SK-1	Y	高坏	17.6	(4.0)			密	良好	淡褐色	内外面マツツ
2	瓜郷遺跡	G4221	上層SK-1	Y	壺		(2.2)	5.6		密	良好	緑褐色	内外面マツツ
3	瓜郷遺跡	G4221	上層	Y	台付壺		(4.8)		頭径4.4	密	良好	緑褐色	外画面マツツ
4	瓜郷遺跡	G4221	下層SK-2	Y	壺		(2.8)			密	良好	淡褐色	内面ナダ、外面ナダ、一部樹皮状
5	瓜郷遺跡	G4221	下層SK-2	Y	壺		(3.4)			密	良好	緑褐色	内面ナダ、一部マツツ、外外面ナダ、一部指押文
6	瓜郷遺跡	G4221	下層SK-2	Y	壺		(2.5)			密	良好	緑褐色	内外面ナダ、口縁部キザミ
7	瓜郷遺跡	G4221	下層SK-3	Y	壺		(2.2)	5.8		密	良好	淡灰色	内外面ナダ、底部ケズリのちナダ
8	瓜郷遺跡	G4221	下層SK-3	Y	壺	21.6	(5.4)		頭径18.9	密	良好	淡茶褐色	内面ナダ、一部板ナダ、指押さえ、外面ナダ、一部マツツ、頭部に保竹、口縁部ヨコナダ、削目
9	瓜郷遺跡	G4221	下層	Y	壺		(2.0)			密	良好	淡褐色	内外面マツツ
10	瓜郷遺跡	立会い		Y	壺		(2.0)			密	良好	淡褐色	内面ナダ、外画面マツツ
11	瓜郷遺跡	立会い		Y	高坏		(4.7)			密	良好	淡茶褐色	内外面マツツ
12	瓜郷遺跡	立会い		Y	壺		(2.8)			密	良好	淡褐色	内面ナダ、口縁部キザミ
13	瓜郷遺跡	立会い		Y	台付壺		(4.6)	10.6		密	良好	淡赤褐色	内外面マツツ、内面一部指押さえ
14	瓜郷遺跡	立会い	R	敲石?	長さ5.3	幅5.1	厚さ2.4					砂岩?	
15	瓜郷遺跡	立会い	Y	台付壺	6.0	(2.0)				密	良好	淡褐色	内面ナダ、外画面マツツ
16	瓜郷遺跡	立会い	拂土中	Y	台付壺		(5.4)			密	良好	淡褐色	内外面マツツ
17	瓜郷遺跡	立会い	西側管路	Y	壺	25.0	(2.8)			密	良好	淡褐色	内面ナダ、一部板ナダ
18	瓜郷遺跡	立会い	西側管路	Y	台付壺		(6.1)			密	良好	淡褐色	内面ナダ、外一部指押さえ
19	瓜郷遺跡	立会い	西側管路	Z	碗	15.3	5.4	7.8		密	良好	淡灰褐色	内面回転ナダ、外面上部回転ナダ、下部圓筒ヘラケズリ、削り出し高台、全面に擦
20	瓜郷遺跡	立会い	拂土置き場	Y	台付鉢	11.8	(2.5)			密	良好	緑褐色	内面ナダ、外一部板ナダ
21	下五井遺址	G5041	下層	P	碗		(1.9)	6.7		密	良好	淡灰色	内面回転ナダ、底部糸切り、貼り付け高台
22	下五井遺址	G5042		P	壺		(1.8)			密	良好	淡灰色	内面回転ナダ、外自然陶
23	下五井遺址	G5051	暗茶色粘質土層	H	壺		(3.5)			密	良好	淡褐色	内面回転ナダ、内面一部指押さえ
24	下五井遺址	G5051	暗茶色粘質土層	H	壺		(5.8)			密	良好	淡赤褐色	内面ナダ、板ナダ、外面白ハケ
25	下五井遺址	G5051	暗茶色粘質土層	H	壺		(3.3)	6.5		密	良好	淡褐色	内外面、底部マツツ、内面一部変化
26	下五井遺址	G5051	暗茶色粘質土層	H	小型高坏	9.4	(3.1)			密	良好	淡褐色	内面ナダ
27	下五井遺址	G5051	暗茶色粘質土層	H	高坏		(5.7)			密	良好	淡赤褐色	内面ナダ、外面マツツ
28	下五井遺址	G5051	暗茶色粘質土層	H	高坏		(2.3)			密	良好	淡褐色	内面ナダ、マツツ
29	下五井遺址	G5051		T	碗	10.3	(4.4)			密	良好	淡灰色	内面回転ナダ、灰釉、外面部有施
30	下五井遺址	G5061	暗茶色粘質土層	H	小皿	10.4	2.8			密	良好	淡褐色	内面ナダ、板ナダ、外面ナダ、一部指押さえ
31	下五井遺址	G5061	暗茶色粘質土層	H	小皿	8.8	2.2			密	良好	淡褐色	内面ナダ、板ナダ、外面ナダ、一部指押さえ
32	下五井遺址	G5061	暗茶色粘質土層	H	小皿	10.5	2.1			密	良好	淡褐色	内面ナダ、板ナダ、外面ナダ、一部指押さえ
33	下五井遺址	G5061	暗茶色粘質土層	H	小皿	9.2	2.1			密	良好	淡褐色	内面ナダ、板ナダ、外面ナダ、一部指押さえ
34	下五井遺址	G5063		T	小皿	12.0	3.0	5.2		密	良好	淡灰褐色	内面回転ナダ、施り出し高台、内面染付
35	下五井遺址	G5064		H	小皿	10.4	1.6			密	良好	淡乳褐色	内面ナダ、外一部指押さえ
36	下五井遺址	G5071		H	小皿	12.3	3.0			密	良好	淡褐色	内面ナダ、板ナダ、外面ナダ、一部指押さえ
37	下五井遺址	G5071		H	小皿	13.3	2.8			密	良好	淡褐色	内面ナダ、板ナダ、外面ナダ、一部指押さえ
38	下五井遺址	G5071		H	内耳鍋		(4.1)			密	良好	淡褐色	内面ナダ
39	下五井遺址	G5072	SK-1	T	碗	5.5	(2.8)			密	良好	淡灰色	内面回転ナダ、内面クシメ、鉄錫
40	下五井遺址	G5072	SK-1	T	擂鉢		(10.2)			密	良好	淡褐色	内面回転ナダ、内面クシメ、鉄錫
41	下五井遺址	G5072	SK-1	H	小皿	10.3	2.2			密	良好	淡褐色	内面ナダ、板ナダ、外面ナダ、一部指押さえ
42	下五井遺址	G5072	SK-1	H	小皿	9.8	1.8			密	良好	淡褐色	内面ナダ、板ナダ、外面ナダ、一部指押さえ
43	下五井遺址	G5072	SK-1	H	内耳鍋		(4.8)			密	良好	淡褐色	内面ナダ、一部指押さえ、煤付量

遺物 No.	遺跡名	グリッド 番号	層位・遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	
44	下五井館址	G5072	下層	T	擂鉢	31.4	16.8	12.2		密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、一部凹輪ヘラケズリ、内面にクシメ、底部凹輪ヘラケズリ、鉄輪	
45	下五井館址	G5072	下層	H	鍋		(7.9)			密	良好	茶褐色	内面ナデ、口縁部ヨコナデ、外側ナデ、一部ヘラケズリ、指押さえ、探付箋	
46	下五井館址	G5072	上層	T	皿		(1.4)	7.4		密	良好	淡白褐色	内外面回転ナデ、貼り付け高台	
47	下五井館址	G5072	上層	H	小皿	9.6	2.8			密	良好	淡褐色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・一部指押さえ	
48	下五井館址	G5072	上層	H	小皿	9.3	2.7			密	良好	淡茶褐色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・一部指押さえ	
49	下五井館址	G5101	SK-1	P	碗		(1.7)			密	良好	灰褐色	内外面回転ナデ	
50	下五井館址	G5101	SK-1	P	碗		(1.9)	7.4		密	良好	灰褐色	内外面回転ナデ、底部系切り、貼り付け高台	
51	下五井館址	G5101	SK-1	T	擂鉢		(12.3)	14.4		密	良好	淡褐色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・一部指押さえ	
52	下五井館址	G5101	SE-1	T	碗	11.4	6.8	5.2		密	良好	灰褐色	内外面回転ナデ、鉄輪	
53	下五井館址	G5101	SE-1	Z	鉢	8.4	(4.1)			密	良好	灰褐色	内外面回転ナデ	
54	下五井館址	G5101	SE-1	H	内耳鍋	30.2	(7.8)			やや粗	やや良	灰褐色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・一部指押さえ、底部板ケズリ、煤付箋	
55	下五井館址	G5101	SE-1	H	内耳鍋	26.2	(8.9)			やや粗	やや良	灰褐色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・一部指押さえ、底部板ケズリ、煤付箋	
56	下五井館址	G5101		P	碗		(3.2)	6.9		密	良好	灰色	内外面回転ナデ、底部系切り、貼り付け高台、墨書き	
57	下五井館址	G5101		T	碗	9.8	(6.5)	5.0		密	良好	灰褐色	内面・口縁部回転ナデ、外面回転ナデ・ラケズリ、削り出し高台	
58	下五井館址	G5101		T	皿	12.6	3.2	5.4		密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、外面一部回転ヘラケズリ、削り出し高台、灰輪	
59	下五井館址	G5101		T	碗	16.4	10.2	7.8		密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ・チシン跡4ヶ所、外側面回転ヘラケズリ、貼り付け高台、灰輪	
60	下五井館址	G5101		T	片口鉢	17.8	10.2	8.8		密	良好	灰褐色	内面ナデ・外面ナデ・指押さえ	
61	下五井館址	G5101		H	小皿	11.6	(2.4)			密	良好	淡乳褐色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指押さえ	
62	下五井館址	G5101		H	内耳鍋	24.6	(4.4)			密	良好	淡褐色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指押さえ、煤付箋	
63	下五井館址	G5121	褐色土シルト層	H	小皿	12.4	2.4			密	良好	淡褐色	内外面ナデ・板ナデ、底部指押さえ	
64	下五井館址	G5122	SK-1	T	皿	10.2	2.9	4.6		密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、鉄輪	
65	下五井館址	G5123	暗褐色シルト層	T	碗		(1.9)	4.8		密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・外面回転ヘラケズリ、削り出し高台、粗	
66	下五井館址	G5124	褐色土層	Z	小碗		(2.5)	3.2		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ・外面回転ヘラケズリ、削り出し高台、粗	
67	下五井館址	G5124	褐色土層	Z	鉢	27.6	(7.8)			密	良好	淡灰色	内面回転ナデ・自然輪	
68	下五井館址	G5125	N	錢寶	2.5	厚さ0.1		重さ3.1g			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ・底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台、金付、鉢
69	下五井館址	G5131	暗茶色粘土層	S	甕		(4.3)			密	良好	淡褐色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指押さえ	
70	下五井館址	G5171		T	碗		(5.6)	8.8		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ・自然輪	
71	下五井館址	G5171		Z	碗	7.1	5.8	3.6		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ・底部回転ヘラケズリ、貼り付け高台、内面にチシン跡、灰輪	
72	下五井館址	G5172	黒褐色泥質土層	H	皿	10.4	2.2			密	良好	淡褐色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指押さえ	
73	下五井館址	G5172	黒褐色泥質土層	H	皿	10.7	2.7			密	良好	淡褐色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指押さえ	
74	下五井館址	G5172	黒褐色泥質土層	T	擂鉢		(1.8)	11.6		密	良好	淡白灰色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指押さえ、内面にヘラケズリ、外面一部指押さえ	
75	下五井館址	G5172	黒褐色泥質土層	H	内耳鍋	21.6	(8.5)			密	良好	淡褐色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指押さえ、内面にヘラケズリ、鉄輪	
76	下五井館址	G5172	黒褐色泥質土層	H	鍋	37.8	(10.1)			密	良好	淡褐色	内面板ナデ・一部指押さえ、口縁部ヨコナデ、外面に煤付箋	
77	下五井館址	G5172	黒褐色泥質土層	H	内耳鍋	23.6	(12.4)			密	良好	淡褐色	内面板ナデ・一部指押さえ、口縁部ヨコナデ、外面に煤付箋	

遺物 No.	遺跡名	グリッド 番号	層位・遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等
78	下五井遺址	G5172	黒褐色混貝土層	H	内耳鍋	27.0	(13.9)			密	良好	淡褐色	内面ナデ・板ナデ・口縁ナデ・ヨコナデ・底部ヘラケズリ・外外面に焼付痕
79	下五井遺址	G5172	黒褐色混貝土層	H	鍋	25.8	(13.0)			やや粗	やや良	淡灰褐色	内面板ナデ・外面ナデ・ハケメマシ・底部ヘラケズリ・煤付痕
80	下五井遺址	G5172	黒褐色混貝土層	R	砥石	長さ6.2	幅4.8	厚さ3.6			良好	砂岩?	
81	下五井遺址	G5173	黄褐色シルト層	P	碗		(2.5)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ・底部切切り・貼り付け高台
82	下五井遺址	G5173	黄褐色シルト層	P	碗		(1.6)	8.1		密	良好	茶灰色	内面板ナデ・外面回転ナデ・底部切切り・貼り付け高台
83	下五井遺址	G5173	黄褐色シルト層	T	碗		(3.0)	5.8		密	良好	淡黄褐色	内面板ナデ・外面回転ヘラケズリ・削り出し高台・灰地
84	下五井遺址	G5173	黄褐色シルト層	T	鉢		(3.3)			密	良好	茶褐色	内面回転ナデ・鉢
85	下五井遺址	G5174	黒灰色粘土	P	碗		(1.7)			密	良好	淡灰色	内面回転ナデ
86	下五井遺址	G5174	黒灰色粘土	Z	碗		(4.0)	6.0		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ・削り出し高台
87	下五井遺址	G5174	黒灰色粘土	H	皿	8.9	1.6			密	良好	淡茶色	内外面ナデ・外蓋一部指揮さえ・孔カケ所
88	下五井遺址	G5182		T	碗	9.0	(4.1)			密	良好	淡黄褐色	内外面回転ナデ・灰地
89	下五井遺址	G5183	暗灰色粘土質層	T	碗		(3.2)	4.0		密	良好	淡黄褐色	内外面回転ナデ・底部切切り・貼り付け高台のちナデ
90	下五井遺址	G5211		P	碗		(1.8)	11.0		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ・高台重ね灰地・外蓋ケリのち回転ナデ・底部回転系切り・灰地
91	下五井遺址	G5212	茶褐色砂質土層	T	皿		(1.5)	6.6		密	良好	淡黄褐色	内面回転ナデ・外蓋回転ヘラケズリ・削り出し高台のちナデ
92	下五井遺址	G5213		T	碗		(2.8)	4.3		密	良好	淡黄褐色	内面回転ナデ・底部ケズリ・削り出し高台のちナデ・鉢
93	下五井遺址	G5215	上層	P	碗		(1.6)	8.0		密	魚好	淡灰色	内面回転ナデ・底部切切り・貼り付け高台のちナデ
94	下五井遺址	G5215	上層	T	鉢		(3.6)	9.2		密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・高台削り出し・灰地
95	下五井遺址	G5215	上層	T	擂鉢	31.6	(12.3)			密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・外蓋回転ヘラケズリ・鉢
96	下五井遺址	G5215	下層	T	皿	12.4	(2.1)			密	良好	淡黄色	内面回転ナデ・外蓋回転ヘラケズリ・一部指揮さえ・鉢
97	下五井遺址	G5215	下層	H	内耳鍋	20.4	(5.8)			密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・外蓋タバコ葉形・口縁ヨコナデ
98	下五井遺址	G5224		P	碗		(1.2)	8.8		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ・底部回転系切り・貼り付け高台のちナデ・自然縫
99	下五井遺址	G5225		K	皿		(1.2)			密	良好	淡灰色	内面回転ナデ
100	下五井遺址	G5225		T	ひょうそく		(2.9)	3.6		密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・底部回転系切り・鉢
101	下五井遺址	G5233		Z	仏壇器	7.0	(2.9)			密	灰白色	内面回転ナデ・外蓋に染付	
102	下五井遺址	G5241	暗茶色粘土層	T	甕	20.1	(4.7)			密	良好	暗灰色	内面回転ナデ
103	下五井遺址	G5241	暗茶色粘土層	H	皿	11.0	(2.9)			やや粗	良好	淡灰褐色	内面板ナデ・外蓋ナデ
104	下五井遺址	G5241	暗茶色粘土層	H	鍋	20.8	(4.6)			密	良好	淡黄褐色	内面板ナデ・外蓋ナデ・一部指揮さえ・保付痕
105	下五井遺址	G5241		Z	碗		(5.35)	5.3		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ・削り出し高台・内蓋に染付・鉢
106	下五井遺址	G5252	暗茶褐色粘土層	Z	碗		(2.8)	4.3		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ・削り出し高台・内蓋に染付・鉢
107	下五井遺址	G6181	暗褐色粘土層	H	壺	12.1	(4.7)			密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・外蓋回転ヘラケズリ・削り出し高台・灰地
108	下五井遺址	G6181	暗褐色粘土層	H	高环		(4.1)			密	良好	淡褐色	内面マツワ・外蓋ミガキ・一部ナデ
109	下五井遺址	G6181	暗褐色粘土層	H	台付壺		(2.7)			密	良好	淡褐色	内面ナデ・外蓋ハケメ
110	下五井遺址	G6181	暗褐色粘土層	H	台付壺		(4.8)	8.2		密	良好	淡褐色	内面板ナデ・外蓋ナデ・タチハケ
111	下五井遺址	G6181	暗褐色粘土層	H	皿		(2.3)			密	良好	淡褐色	内面ナデ・一部指揮さえ
112	下五井遺址	G6191		T	碗		(2.4)	5.3		密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・外蓋回転ヘラケズリ・削り出し高台・灰地
113	下五井遺址	G6191		T	碗		(2.3)	3.9		密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・外蓋・底部回転ヘラケズリ・削り出し高台・灰地
114	下五井遺址	G6193		T	碗		(4.0)	6.5		密	良好	淡褐色	内面板ナデ・外蓋ナデ・一部未調整・底部マツワ
115	下五井遺址	G6201		H	壺		(3.6)	5.5		密	良好	淡褐色	

遺物 No.	遺跡名	グリッド 番号	層位・遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等
116	下五井館址	G6201		T	擂鉢		(5.0)			密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、口縁部ヨコナデ、内面クシメ、鉄輪
117	下五井館址	G6201		T	壺		(9.7)			密	良好	茶褐色	内外面回転ナデ、内面一部被テナデ・押さえ、外面上に押印文
118	下五井館址	G6201		H	皿	16.0	(2.3)	7.0		密	良好	淡褐色	内面ナデ、板ナデ、外面部メツ・ハカリ目盛り
119	下五井館址	G6201		H	内耳鍋	29.0	(6.1)			密	良好	棕褐色	内面板ナデ、外面部ナデ・押さえ、口縁部ヨコナデ
120	下五井館址	G6201		H	内耳鍋	29.0	(8.6)			密	良好	淡褐色	内面板ナデ、外面部ナデのちナデ・部指揮さえ、外面上に押印文
121	下五井館址	G6202	黄褐色粘質土層	Z	碗		(3.7)	5.2		密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、底部ナデ、削り出高台、外面上に塗付
122	下五井館址	G6202	黄褐色粘質土層	T	鉢	31.0	(11.8)			密	良好	茶褐色	内面回転ナデ・板ナデ・指揮さえ、外面部回転ナデ、口縁部ヨコナデ、鉄輪
123	下五井館址	G6202	黄褐色粘質土層	H	皿	10.0	(2.3)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ、底部指揮さえ
124	下五井館址	G6211	黄褐色粘質土層	H	皿	7.2	(1.3)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ、底部指揮さえ
125	下五井館址	G6211	青褐色粘質土層	D	土玉	最大径 2.8	絶高2.8			密	良好	淡褐色	外面部ナデ・指揮さえ、中心部に孔
126	下五井館址	G7051		N	錢鉢	2.5	厚さ0.1						
127	下五井館址	G7052		T	碗		(1.2)	6.2		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、削り出し高台、灰輪
128	下五井館址	G7053		P	碗		(1.9)	7.0		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部ナデ、ヘラ蓋、貼り付け高台、モミ痕
129	下五井館址	G7053		P	碗		(2.9)	7.0		密	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ、底部回転糸切り、貼り付け高台、モミ痕
130	下五井館址	G7053		T	碗		(2.7)	7.6		密	良好	淡灰褐色	内面回転ナデ、外面部回転糸切り、貼り付け高台、モミ痕
131	下五井館址	G7061		P	壺		(4.0)	16.6		密	良好	淡茶褐色	内面回転ナデ・一部ハケメ、外面部ナデのちナデ、底部未調査・マツツ
132	下五井館址	G7061		Z	碗		(1.8)			密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、削り出し高台、灰輪
133	下五井館址	G7071		T	擂鉢	35.4	(2.8)			密	良好	茶褐色	内外面回転ナデ、口縁部ヨコナデ、鉄輪
134	下五井館址	G5051 G5061	茶褐色土層	Y	高杯	20.7	16.0	10.2		密	良好	淡褐色	内外面ナメツ・外間に黒斑有り・鉢部の面板ナデ・ハケメ、外面部丸3ヶ所
135	下五井館址	G5051 G5061	茶褐色土層	T	花生	(5.7)	8.8			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部回転糸切り、鉄輪
136	下五井館址	G5051 G5061	貝層	T	碗		(5.5)	5.9		密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・外面・底部回転ヘラケズリ、削り出し高台、鉄輪
137	下五井館址	G5051 G5061	貝層	T	碗		(4.7)	8.3		密	良好	淡黃褐色	内面回転ナデ・チーン裏、外面部回転ナデ・鉄輪、底部回転ヘラケズリ、削り出し高台、灰輪
138	下五井館址	G5051 G5061	貝層	T	菊皿	13.8	3.8	8.6		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、貼り付け高台、灰輪
139	下五井館址	G5051 G5061	拂土中	T	水鉢	16.6	(5.4)			密	良好	淡褐色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、鉄輪
140	下五井館址	G5051 G5061	拂土中	H	皿	8.7	(2.4)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ、内面に板ナデ痕、外面部指揮さえ
141	下五井館址	G5071 G5074		T	碗	15.8	(8.6)			密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ・鉄輪
142	下五井館址	G5071 G5074		T	天目茶碗		(4.4)	4.8		密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、外面部ナデ・底部回転ヘラケズリ、削り出し高台、鉄輪
143	下五井館址	G5071 G5074		T	壺		(9.4)	12.2		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ・外面部ナデ、底部未調整、鉄輪
144	下五井館址	G5071 G5074		T	擂鉢	26.8	(3.3)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ・鉄輪

遺物 No.	遺跡名	グリット 番号	層位・遺構	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等
145	下五井遺址	G5071 G5074		T	壺		(5.9)	16.4		密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・様付着、外面ケズリ、底部未調整
146	下五井遺址	G5071 G5074		H	皿	10.4	2.1			密	良好	淡褐色	内外面ナデ、底部指押さえ、一部様付着
147	下五井遺址	G5071 G5074		H	皿	11.2	2.9			密	良好	淡褐色	内外面ナデ・板ナデ、底部指押さえ
148	下五井遺址	G5071 G5074		H	内耳鏡	25.1	(6.4)			密	良好	淡褐色	内面ナデ・板ナデ、外側ナデ・一部指押さえ、口縁部ヨコナデ、様付着
149	下五井遺址	G5071 G5074		H	内耳鏡	28.2	(15.9)			密	良好	淡白褐色	内面ナデ・板ナデ、外側ナデ・ハケメー一部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、煤付量
150	下五井遺址	G5074 G5075		T	天目茶碗	10.4	6.4	4.0		密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ・一部回転ヘラケズリ、削り出し高台、鉄錆
151	下五井遺址	G5074 G5075		Z	碗	12.8	6.5	5.2		密	良好	淡青灰色	内面回転ナデ・染付、削り出し高台
152	下五井遺址	G5074 G5075	茶褐色土層	H	内耳鏡	22.8	13.9			密	良好	淡褐色	内面ナデ・板ナデ、外側ナデ・一部ハラケズリ、指押さえ、口縁部ヨコナデ、様付着
153	下五井遺址	G5212 G5213	茶褐色土層	T	碗	11.4	(6.1)			密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・一部回転ヘラケズリ、胎
154	下五井遺址 西側	G6171	暗灰色粘質土層	T	皿	15.0	(2.5)			密	良好	淡褐色	内面回転ナデ・外側回転ナデ・頭部ヘラケズリ、鉄錆
155	下五井遺址 西側	G6171	暗灰色粘質土層	H	皿	6.1	1.7	2.2		密	良好	淡茶褐色	内面ナデ・口縁部ヨコナデ、外側ナデ・一部指押さえ
156	下五井遺址	G6203 G3211		P	穂		(2.3)	7.1		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ・底部未切り、貼り付け高台・妙複有り
157	下五井遺址		表採	P	壺		(17.6)	11.4		密	良好	茶褐色	内面回転ナデ・内面一端板ナデ・指押さえ、底部未調整、自然釉
158	下五井遺址	G5062	暗茶褐色粘質土層	W	板状大製品	長さ27.5	幅3.2	厚さ0.3					表面に加工痕
159	下五井遺址	G5062	暗茶褐色粘質土層	W	円形曲物 容器	径16.0	(4.8)	厚さ0.2					側板
160	下五井遺址	G5101	SE-1	W	曲物底板	径 (18.0)		最大 厚さ0.7					表面に工具・加工痕
161	下五井遺址	G5101	SE-1	W	井戸枠 側板	縦35.0	横12.9	厚さ1.2					表面に工具・加工痕
162	下五井遺址	G5101	SE-1	W	井戸枠 側板	縦17.7	横7.5	厚さ1.2					表面に工具・加工痕
163	下五井遺址	G5101	SE-1	W	井戸枠	長さ 11.7	幅3.5	厚さ0.8					表面に工具・加工痕
164	天王遺跡	G6021	暗灰色砂質土層	H	壺		(2.5)			密	良好	淡褐色	内面ナデ
165	天王遺跡	G6021	暗灰色砂質土層	S	壺		(3.5)			密	良好	淡灰褐色	内面回転ナデ
166	天王遺跡	G6023	暗灰色砂質土層	H	壺		(2.5)			密	良好	淡褐色	内面ナデ
167	天王遺跡	G6025	茶褐色砂質土層	S	壺		(2.0)			密	良好	淡灰色	内面回転ナデ

*法量の数値はcm、()は残存数値。

Y—弥生土器、S—須恵器、K—灰釉陶器、P—中世陶器、T—陶器、Z—磁器、H—土師器、R—石器、

N—鉄・銅製品、W—木製品

第6章 動物遺体

1. 資料の採取と概要 (第3・4表)

今回分析した動物遺体は現地調査で各グリッドから検出された貝層から採集したものである。大半は数点の採取にとどまつたが、2例はまとまった量の貝層のサンプリングが行われている。貝層ごと採取してあるものをA、貝殻のみを採取してあるものをBと区別してみると、Aサンプルは2点、Bサンプルは10点であった(第3表)。採取したAサンプルについては水洗選別を行い、3mm、1mm、0.5mmのメッシュを使用している。

Aサンプル中に含まれる内容物は第4表に示した。大半が食用とされた貝類であるが、微小貝なども認められた。残りの殆どは石であった。これら以外に魚類がA1サンプルで若干確認されている。植物遺体は各サンプルから僅かであるが出土する。茎や根などの植物繊維が目立ち、種子や種子の皮も若干確認されたが、今回は分析していない。この他に炭化物も微量であるが各サンプルに含まれている。

以下では、動物遺体のうち貝類・魚類について分析を行う。出土した動物遺体の種名は、第5表に示す。魚骨の同定は樋泉岳二氏(早稲田大学)にお願いしている。

2. 貝類・魚類 (第5表・第6表)

貝類は腹足綱4種、二枚貝綱4種で、合計8種(微小貝を除く)と少ない(第5表)。これはサンプル採取量の少なさによるものと思われる。サンプルごとの貝類組成は第6表に示している。Aサンプルでは、16世紀中葉頃のA1では感潮域群集のヤマトシジミが主体であり、92.7%も占めている。内湾砂底群集のハマグリやイボキサゴも各3.6%ずつと若干量がみられる。時期不明のA2サンプルでも感潮域群集のヤマトシジミが主体である。Bサンプルでは内湾砂底群集のハマグリや感潮域群集のヤマトシジミが目立つ。太平洋沿岸で採れるダンペイキサゴもB5サンプルで確認されている。また、B4サンプルから淡水域のオオタニシも確認されている。

魚類は、A1サンプルから若干の魚骨が出土している。このうち同定できたものはウナギ科ウナギの前上顎骨-鰓骨-前鰓骨板の1点であった。

以上、出土する貝類・魚類をまとめると、貝類では遺跡周辺の豊川や江川の汽水域での採貝活動が中心であり、三河湾の六条瀬などへも採貝に出かけていたことがわかる。太平洋沿岸で採れるダンペイキサゴについては、採りに行ったか、売買でもたらされたのであろう。魚類については1点のみと少ないため様相が不明であるが、ウナギが出ていることから、遺跡周辺の豊川や江川での漁獲活動が想定されよう。

第3表 動物遺体出土調査区一覧表

番号	グリッド番号	層位	時期	出土動物遺体	
A 1	G5172	黒褐色泥土貝層	16世紀	第6表参照	
A 2	G5192		不明	第6表参照	
B 1	G5101	S K - 1	不明	獸骨片?	
B 2	G5131	暗茶色粘質土層	不明	マガキ左殻1	
B 3	G5172	黒褐色貝層	不明	ハマグリ右殻1、ツメタガイ1	
B 4	G5224		不明	ハマグリ左殻8、右殻7、ヤマトシジミ左殻3／右殻7、アサリ左殻2／右殻2、オオタニシ1	
B 5	G5231		不明	ダンベイキサゴ1	
B 6	G5233		不明	ハマグリ右殻1	
B 7	G6193		不明	ハマグリ左殻1	
B 8	G6201		不明	ハマグリ左殻4／右殻2、ヤマトシジミ左殻4／右殻4	
B 9	G6202	黄褐色粘質土層	不明	ヤマトシジミ左殻3／右殻1	
B 10	G6211	淡黄褐色貝層	不明	ハマグリ右殻1、ヤマトシジミ左殻1／右殻2	

第4表 貝層サンプル内容物組成表

番号	水洗後残留物重量(g)				貝殻 g	獸骨 g	魚骨 g	フジワ g	微小貝 g	炭化物 g	土器 g	石 g	植物 g	種子 g
	3mm	1mm	0.5mm	計										
A 1	124.4	41.7	62.2	228.3	110.1		○		0.1	2.1		103.0	0.1	○
A 2	27.9	3.5	3.7	35.1	31.1				○	0.1		3.5		○

○は0.1g以下を示す。

第5表 動物遺体種名一覧表

I. 軟体動物門 MOLLUSCA

腹足綱 GASTROPODA

- ニシキウズ科イボキサゴ
- ニシキウズ科ダンベイキサゴ
- タマガイ科ツメタガイ
- タニシ科オタニシ

Umbonium (Suchium) moniliferum (LAMARK)*Umbonium (Suchium) giganteum* (LESSON)*Neverita (Glossaulax) didyma* (RÖDING)*Cipangopaludina japonica* (v.MARTENS)

二枚貝綱 BIVALVIA

- ジミガイ科ヤマトシジミ
- イタボガキ科マガキ
- マルスレガレイ科アサリ
- マルスレガレイ科ハマグリ

Corbicula (s.s.) japonica (PRIME)*Crassostrea gigas* (THUNBERG)*Ruditapes philippinarum* (ADAMS & REEVE)*Meretrix lusoria* [RÖDING]

II. 脊椎動物門 VERTEBRATA

魚綱 PISCES

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

- ウナギ科ウナギ

Anguilla japonica (TEMMINCK & SCHLEGEL)

第6表 貝類組成表

種名 サンプルNo	腹足綱			二枚貝綱			計
	キサゴ	小計	ハマグリ 1/r	ヤマトシジミ 1/r	小計		
A 1 1/r 最小数 %	2 3.6	2 3.6	2/2 2 3.6	51/32 51 92.7	53 96.3	55 99.9	
A 2 1/r 最小数 %	0 0	0 0	1/3 3 30.0	7/4 7 70.0	10 100.0	10 100.0	

第7章 まとめ

今回の発掘調査はマンホール設置工事に合わせた調査で、限られた時間で行われた小規模な調査である。各調査区は約5mと小さくて点在しており、ちょうど遺跡の範囲確認調査と類似した内容となつた。ここでは、調査によって判明したことをまとめるものとする。

まず、瓜郷遺跡の調査は、史跡指定地西側の旧東海道が調査対象となつた。この辺りは遺跡の縁辺部に相当する。調査箇所及び管路部分の立会箇所の殆どは、過去に埋設された水道管等の掘削によつて破壊されていた。しかし、部分的に未攪乱層は残存しており、G4221からは遺構・遺物が出土している。G4221では、標高0.4m程から弥生時代中期の遺構とが検出され、遺物も出土している。貝層は確認できなかつたが、弥生時代の包含層は数層確認できた。管路部分の立会調査では、中期の遺構面から60cm以上の上層からも弥生土器が出土している。弥生時代だけでは何層もの包含層が60cm以上堆積しているのである。また後述する近世東海道と弥生時代の包含層の間に、所々砂層が堆積していた。古墳時代～中世の間に河川の氾濫等が幾度かあったものと推測される。今回の調査で注目されるは、近世東海道を検出したことである。近世東海道については、その構造は不明な点が多い。今回はG4201、G4211、G4221及び管路立会部分で近世東海道及び付随する松並木の松根を検出している。G4221で3面の旧東海道を検出しているが、管路立会部分では4面の旧東海道を検出している。基本的には1cm以下の小石で構成された砂礫層を5～10cmの厚さに敷いて地固めを行い、その上に5～10cmの厚さで粒度の細かな灰色砂質土を敷いて路面としている。管路立会部分では密接した3面の下に10cmほどの間層を挟んで1面が存在していた。これら路面の築造時期は不明だが、近世東海道は何度か補修されていたものと考えられ、密接する上部3面は近世のものと考えるのが妥当と思われる。最下面については、築造当初の近世東海道とも考えられるが、近世東海道以前の中世まで遡る可能性も考えられる。

次に下五井館址についてであるが、館の構造などは地籍図などによって推定されている。字名の城屋敷を取り囲むような環状の道路があり、この道路部分の発掘調査では若干の遺物は出土するが、遺構は検出されていない。おそらくこの部分については、堀や土塁など館を取り囲む施設があったものと推測される。環状道路の内側、館の内部と推測される部分については、G5071、G5072、G5075、G5077の4箇所が調査されている。しかし、埋設管などのため充分な調査ができておらず、検出できた遺構はG5072の土壙1箇所のみであった。出土する遺物も陶器など、館廃絶後のものが多い。館内部の構造については様相を窺うことはできなかつた。一方、環状道路の南側、G5101では中世後期の井戸や土壙、G5174では溝や土壙が検出されており、館存続時にはこの辺りを中心に屋敷が存在していたことがわかつた。また館西端のG6181では古墳時代前期の土師器が標高1.7mの遺物包含層から出土している。G6201では古墳時代の土師器が、G6211では弥生～古墳時代の土玉が出土している。古墳時代は海岸線が近くにあったものと思われ、三河湾近くの豊川河口部に古墳時代前期の集落が営まれていたものと考えられる。瓜郷遺跡との関係から考えると興味深いものと思われる。発掘調査の結果では下五井館址の内容について明らかにできなかつたが、遺構や遺物が希薄なことから小規模な

館址であったものと考えられる。

天王遺跡については、G6021、G6023、G6024、G6025において古代の溝と須恵器、土師器等の遺物が出土しており、古代においてこの辺りに集落が存在していたものと考えられる。ただ、遺跡範囲のG6012～G6014からは遺構、遺物が出土していない。この辺りが遺跡範囲に含まれるのか、それとも外れるのかは再度確認調査を行う必要があろう。

宗正遺跡については、G4031の1箇所が発掘調査されたのみである。この調査では、遺構、遺物は出土しておらず、遺跡の様相はよく判っていない。

報告書抄録

ふりがな	うりごういせき（よん）・しもごいやかたし・てんのういせき・むねまさいせき							
書名	瓜郷遺跡（IV）・下五井館址・天王遺跡・宗正遺跡							
副書名	-下五井・横須賀地区特定環境保全公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査-							
卷次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第88集							
編著者名	岩瀬彰利							
編集機関	豊橋市教育委員会							
所在地	〒440-0801 愛知県豊橋市今橋町3番地の1 TEL0532-51-2879							
発行年	西暦2007年3月19日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
うりごういせき 瓜郷遺跡 しもごいやかたし 下五井館址 てんのういせき 天王遺跡 むねまさいせき 宗正遺跡	とよはしうりごういせき 豊橋市瓜郷町 よし道他	市町村 23201	遺跡番号 79780 79268 79974 791196	34度 47分 22秒他	137度 22分 28秒他	20031003 ~20050823	405m ²	下水道 工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
瓜郷遺跡	集落遺跡	弥生	土壙	弥生土器		近世東海道を検出。		
下五井館址	城館址	古墳 中世～近世	井戸・土壙	土師器、土玉 中世陶器、土師器等				
天王遺跡	集落遺跡	古代	溝	須恵器、土師器				
宗正遺跡	散布地		なし	なし				

写 真 図 版

写真図版 1



1. 瓜郷遺跡G1091全景（北から）



2. 瓜郷遺跡G1091西壁（東から）

写真図版 2



1. 瓜郷遺跡G4201西壁（東から）



2. 瓜郷遺跡G4221西壁（東から）

写真図版 3



1. 瓜郷遺跡G4221全景（北から）



2. 瓜郷遺跡G4221南壁（北から）

写真図版 4



1. 下五井館址G5101全景（西から）



2. 下五井館址G5101東壁（西から）

写真図版 5



1. 下五井館址G5122全景（東から）



2. 下五井館址G5231全景（北から）

写真図版 6



1. 下五井館址G5172全景（南から）



2. 下五井館址G5172北壁（南から）

写真図版 7



1. 下五井館址G5174全景（北から）



2. 下五井館址G5224全景（南西から）

写真図版 8



1. 下五井館址G6181全景（南から）



2. 下五井館址G6202全景（西から）



1. 下五井館址G6192全景（北から）



2. 下五井館址G6192西壁（東から）

写真図版10



1. 下五井館址G6202全景（西から）

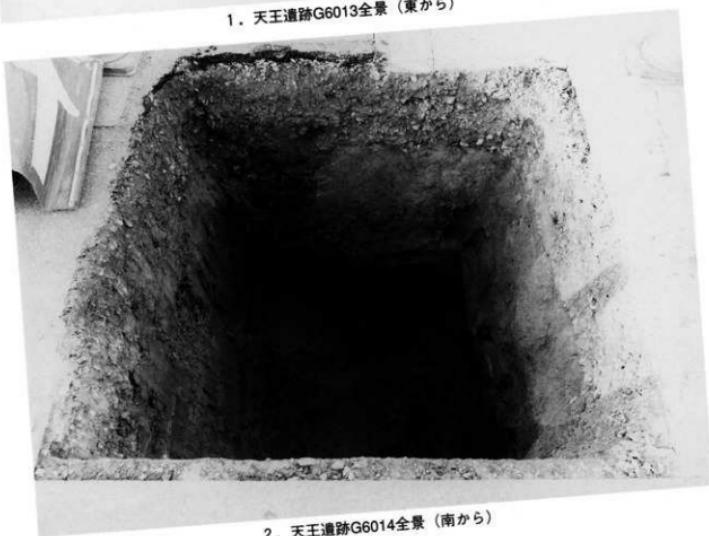


2. 下五井館址G6211南壁（北から）

写真図版11



1. 天王遺跡G6013全景（東から）



2. 天王遺跡G6014全景（南から）

写真図版12



1. 天王遺跡G6015全景（西から）



2. 天王遺跡G6021全景（南から）



1. 天王遺跡G6025全景（南から）



2. 天王遺跡G6025完掘後全景（南から）

写真図版14

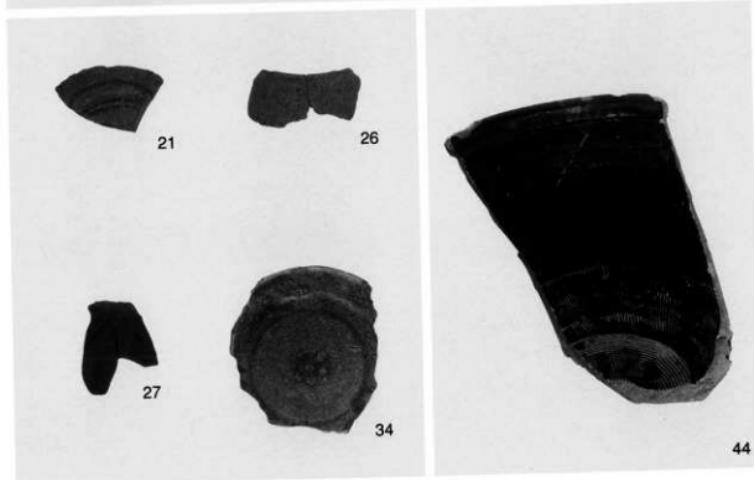
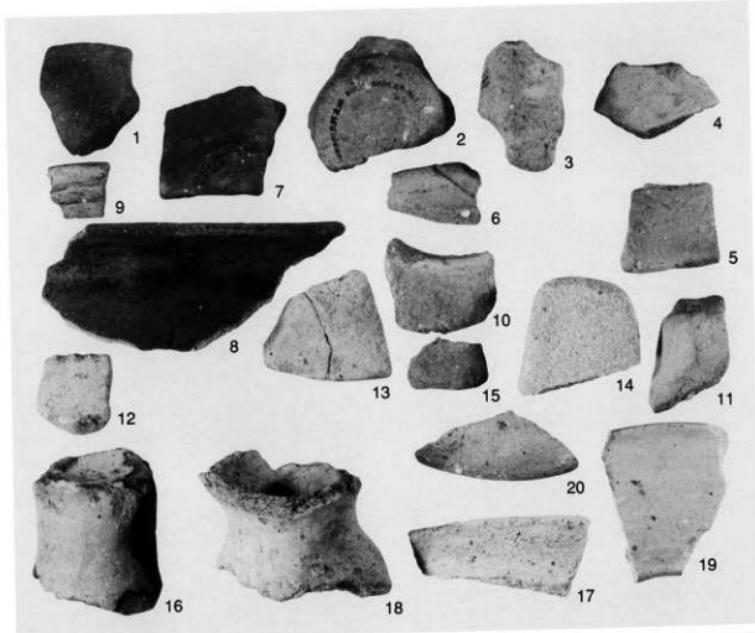


1. 天王遺跡G6023全景（南から）



2. 宗正遺跡G4031全景（東から）

写真図版15



出土遺物-1

写真図版16



写真図版17



68



87



125



134



150



151



152



157



160



159



164



165



166



167

出土遺物一 3

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第88集

瓜郷遺跡(IV)・下五井館址
・天王遺跡・宗正遺跡

2007年3月19日

発行 豊橋市教育委員会C
美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3番地の1

印刷 共和印刷株式会社